

博士論文（要約）

蜂起〈インティファダ〉と占領下のパレスチナ（1967～1993 年）

鈴木啓之

本稿の内容は次の論文をもとに、大幅な加筆、修正を加えたものである。

序章 …書き下ろし

## 第一部

第一章 …「パレスチナ被占領地における政治活動の発展——キャンプ・デーヴィッド合意（1978 年）と揺れ動く地域情勢——」『中東学会年報』30(1): 61-94., 2014 年

第二章 …「占領と抵抗の相克——被占領地のパレスチナ人市長を事例に——」『境界研究』3: 99-116., 2012 年

第三章 …「抵抗する『市民社会』——パレスチナ被占領地を事例に——」『相関社会科学』23: 35-53., 2014 年

## 第二部

第四章 …「PLO によるヨルダンとの同盟関係の模索・1982～1987 年——インティファダ前史としての外交戦略の展開——」『中東学会年報』32(1): 37-70., 2016 年

第五章 …「大衆蜂起の言説——インティファダ（1987～1993 年）とリーフレット研究の可能性——」『アジア・アフリカ言語文化研究』89: 119-165., 2015 年

第六章 …「2 つのインティファダと和平：西岸地区およびガザ地区と PLO・1987～2000 年」鶴見太郎・今野泰三・武田祥英編『オスロ合意から 20 年：パレスチナ／イスラエルの変容と課題』, (TIAS Middle East Research Series, No.9) 95-107., 2015 年  
「中東和平と西岸・ガザ地区：暫定自治区設立による「パレスチナ人」の限定化」『アジア地域文化研究』11: 216-232., 2015 年

終章 …書き下ろし

## 凡例

### 1. アラビア語のローマ字転写と片仮名表記

- ローマ字転写は、『国際中東研究ジャーナル』(*International Journal of Middle East Studies*, IJMES) が公開する転写方式 (Transliteration System) を参考として、次の通りとする。

ء	'	د	d	ض	ḍ	ك	k
ب	b	ذ	dh	ط	ṭ	ل	l
ت	t	ر	r	ظ	ẓ	م	m
ث	th	ز	z	ع	‘	ن	n
ج	j	س	s	غ	gh	ه	h
ح	ḥ	ش	sh	ف	f	و	w
خ	kh	ص	ṣ	ق	q	ي	y
						ة	a
						ال	al- *1

(出所) IJMES Transliteration System

\*1 非分離形の前置詞に続く場合は、-l- と表記する

長母音の ا または آ ā	短母音 ا a	二重母音 او aw
و ū	ـ u	اي ay
ي ī	ـ i	

- 語頭のハムザ (ʾ)、語末のターマルブータ (-at の t) は転写しない。ただし、長母音 ā の後にターマルブータが続く場合のみ、例外的に t と表記する。

例 : صلاة (ṣalāt)

- 名詞、形容詞の語末母音 (-un, -in, -an/-u, -i, -a) は原則として省略する。ただし、名詞の副詞的目的格 (-an) や対格化した前置詞 (-a) は、その他の動詞や前置詞と同じように語末母音を表記する。
- 定冠詞 al-は、直後の語頭に太陽文字がある場合や、先行する語がある場合でも、統一して al- と表記する。ただし、非分離前置詞のあとに続く場合のみ、例外的に l- と表記する。

例 : لجنة التوجيه الوطني (Lajna al-Tawjīh al-Waṭanī)

القيادة الوطنية الموحدة للانتفاضة (al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwaḥḥada li-l-Intifāḍa)

- ・片仮名表記は、『岩波イスラーム辞典』[大塚ほか 2002]を参考として、長母音はアー、イー、ウー、短母音はア、イ、ウと表記する。
- ・二重母音はアウ、アイと表記する。ただし、パレスチナの地名に限っては、慣用的な発音を考慮し、bayt は「ベイト」、zayt は「ゼイト」、dayr は「デイル」と表記する。
- ・子音は原音に近い仮名をあてる。
- ・人名中に属格による先行語の限定（イダーファ）が含まれる場合、分かち書きはせず一語として表記する。

例：アブドゥッラー（‘Abd Allāh）

- ・固有名詞や人名などの片仮名表記では、原則として定冠詞「アル」を省略する。ただし、先行する研究文献や概説書で慣例的に定冠詞をつけた形で表記される、アル＝アクサー・インティファーダ、アル＝アクサー・モスク、アル＝クトゥス大学、アル＝ハック（組織名）、アル＝ビーレを例外とした。

例：『シャアブ』（*al-Sha'b*）

- ・先行する研究文献や概説書で慣例的に定着している固有名詞は、上記の例外とした。例えば人名では、アキル → アケル、アブドゥンナーシル → ナセル、クライウ → クレイ、ジュールジュ → ジョルジュ、ダフラーン → ダハラーン、ハイカル → ヘイカル、バルグースィー → バルグーティ、ハワーティマ → ハワートメ、フライジュ → フライジ、ヤフヤー → ヤヒヤー、ユーヌス → ユーニス、地名では、アリーハー → エリコ、アル＝ビーラ → アル＝ビーレ、ジャニーン → ジェニーン、ガッザ → ガザ、バイト・ラハム → ベツレヘム、ハリール → ヘブロン、ラムラ → ラムレ、術語では、アアヤーン → アーヤーンとした。

## 2. 記号

「」：文末に出典が表記される場合は引用、その他は筆者による強調

「」内に「」を表記する場合は、『』で示す

『』：書籍、または資料の名称

〔 〕：引用文のなかでの引用者による挿入

[ ]：参考文献の表記

〔中略〕、または〔後略〕：引用文のなかで、一部を引用者が省略したことを示す

（ ）：筆者による補足、または原綴の表記

（ ）内に（ ）を表記する場合は、[ ]で示す

【】：地図、表の番号を示す

### 3. 略記一覧

- ・本文で初出の箇所日本語訳とアラビア語または英語の原綴、略記を示し、その後は引用箇所を除きすべて略記で表記する。

例：「パレスチナ解放機構」(Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya, Palestine Liberation Organization, 略称：PLO)

DFLP … Democratic Front for the Liberation of Palestine (パレスチナ解放民主戦線)  
NGC … National Guidance Committee (民族指導委員会)  
PA … Palestinian National Authority (パレスチナ暫定自治政府)  
PFLP … Popular Front for the Liberation of Palestine (パレスチナ解放人民戦線)  
PLO … Palestine Liberation Organization (パレスチナ解放機構)  
PNC … Palestine National Council (パレスチナ民族評議会)  
PNF … Palestine National Front (パレスチナ民族戦線)  
WAFA … Wikāla al-Anbā' wa al-Ma'lūmāt al-Filasṭīniya (パレスチナ情報報道局)

- ・資料名については、[ ] 内での使用の際には、初出の場合であっても略記のみ記載する。

IISH … International Institute of Social History (国際社会史研究所) 収蔵資料  
JPS … Journal of Palestine Studies (『パレスチナ研究ジャーナル』)  
NAB … ナーブルス市立図書館収蔵資料  
PAD … 『パレスチナ・アラブ文書集』記載資料  
WA … 『アラブ統一日誌・文書集』記載資料

- ・参考文献中で用いる略記は、次の通りとする。

ed. または eds. … 編者を示す

et al. … 著者、または編者が4人以上の場合、冒頭の1人を除いて省略したことを示す

n.d. … no date (発行年が不明であることを示す)

N.p. … no place (発行地が不明であることを示す)

n.p. … no publisher (出版社が不明であることを示す)

### 4. 原綴の表記

- ・原則として本文の初出箇所に示す。人物は、生没年も可能な限りで初出箇所に示した。なお、議論で中心的に扱わない組織や人物、概念については、脚注に原綴を表記したものがある。

\*1 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費 24・8429、および特別研究員奨励費 15J06223）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 蜂起〈インティファダ〉と占領下のパレスチナ（1967～1993 年）

<b>序章</b>	<b>1</b>
<b>第一部 占領下の人々</b>	<b>17</b>
<b>第一章 占領と人々——イスラエルとヨルダンのはざまで——</b>	<b>19</b>
I. はじめに	19
II. 占領の始まり	21
III. 継続したヨルダンとの関係	34
IV. 蒔かれたインティファダへの種	41
V. おわりに	51
<b>第二章 「自治」に反対、独立国家に賛成——自治構想への抵抗——</b>	<b>52</b>
I. はじめに	52
II. パレスチナ人指導者の「誕生」	54
III. キャンプ・デーヴィッド合意が生んだ行動原則	62
IV. 「PLO への支持」の戦略的側面	72
V. おわりに	80
<b>第三章 鉄拳政策との対峙——「指導者を見せない」抗議活動——</b>	<b>82</b>
I. はじめに	82
II. 組織活動の時代へ	83
III. 「指導者を見せない」工夫	90
IV. 蜂起を繰り返した 1980 年代	97
V. おわりに	104
<b>第二部 PLO と西岸・ガザ地区</b>	<b>106</b>
<b>第四章 PLO と西岸・ガザ地区——政治外交の発展と「独立国家」の模索——</b>	<b>108</b>
I. はじめに	108
II. パレスチナ全土解放から国家建設へ	112
III. ヨルダンとの関係改善	126
IV. インティファダ直前の PLO	137
V. おわりに	146
<b>第五章 インティファダ——蜂起の政治空間と PLO——</b>	<b>148</b>
I. はじめに	148
II. 蜂起の政治空間	153
III. 政治外交を強める PLO	164
IV. 蜂起を維持する努力	171
V. おわりに	179
<b>第六章 和平交渉と西岸・ガザ地区——インティファダの終焉——</b>	<b>181</b>
I. はじめに	181
II. 湾岸戦争という転換点	183
III. マドリード和平会議への参加	187
IV. オスロ秘密交渉と西岸・ガザ地区	195
V. おわりに	208
<b>終章</b>	<b>210</b>
<b>巻末資料</b>	<b>215</b>
<b>参照資料・文献</b>	<b>233</b>

## 図表目次

地図 1-1	西岸地区およびガザ地区と周辺地域	20
地図 1-2	アロン計画が示した西岸地区分割案	26
地図 2-1	市議会設置都市（西岸地区）	53
図 1-1	西岸・ガザ地区居住の就労者のなかでイスラエルで就労する者の割合（％）	48
図 3-1	西岸・ガザ地区における分野別就労人口	89
図 5-1	インティファダでのパレスチナ人とイスラエル人の死者	160
図 5-2	統一指導部、ハマース、ファタハによる発行数（ナールス市立図書館保管）	174
表 0-1	インティファダの各年における展開	3
表 1-1	イスラエルの歴代首相と国防大臣	25
表 1-2	西岸・ガザ地区における商工会議所の設立	45
表 3-1	西岸・ガザ地区における党派系労働組合連合	92
表 3-2	西岸・ガザ地区における党派系女性団体	93
表 3-3	西岸・ガザ地区の学生選挙の結果	94
表 3-4	西岸・ガザ地区における党派系学生団体	95
表 3-5	インティファダ直前の抗議活動の変遷	101
表 4-1	パレスチナ人組織の党派関係	110
表 4-2	アラブ諸国によるスムード基金への拠出額	125
表 4-3	スムード基金への拠出割り当て額と実際の拠出額	125
写真 1-1	ヨルダンのフサイン国王と面会するサーイフ師	31
写真 1-2	パレスチナ会議が開催・『フィラスティーン』紙（1964年5月28日付）	35
写真 1-3	ハティーブ、ジャアバリ、シャワー	36
写真 1-4	食品の値上げ・『クドゥス』紙（1974年11月11日）	47
写真 2-1	これが諸君の候補者だ…彼らを選ぼう！・『ファジュル』紙（1976年4月13日付）	55
写真 2-2	アル＝アクサー防衛と入植反対のデモ続く・『クドゥス』紙（1976年2月14日付）	56
写真 2-3	1976年選出の市長・シャカア、ハラフ、カワースイミー	59
写真 2-4	西岸・ガザ地区で政治集会の開催が許可・『クドゥス』紙（1978年10月5日付）	67
写真 2-5	カワースイミーとミルヒム、北に移送!?・『ファジュル』紙（1980年12月6日付）	77
写真 2-6	フィロメノスの殉教の壁画（ナールス）	78
写真 2-7	シャカアの帰還・祝賀にわくナールス・『シャアブ』紙（1980年7月10日付）	79
写真 3-1	紙面を埋めるカワースイミーへの弔辞・『シャアブ』紙（1985年12月31日付）	85
写真 3-2	1981年ビールゼイト大学におけるイスラーム・ブロックのパンフレット	96
写真 4-1	ヤヒヤーとハサン、アブー・ジハード	112
写真 4-2	国連総会で演説するアラファート・1974年11月	121
写真 5-1	インティファダの様子	149
写真 5-2	統一指導部とハマースのリーフレット	152
写真 5-3	収監者による「アンサー3」の外観スケッチ	160
写真 5-4	8人の追放者ら、ベカー高原へ・『ファジュル』紙（1989年6月30日付）	161
写真 6-1	マドリードの英雄たち、間もなく帰還へ・『シャアブ』紙（1991年11月8日付）	194
写真 6-2	アラファートと抱擁するアシュラーウィー・『シャアブ』紙（1992年6月20日付）	196
写真 6-3	オスロ合意（1993年）の手書き修正部分（抜粋）	202



## パレスチナ問題略史

西暦	出来事	
1920	イギリスによる委任統治開始	・オスマン帝国領の東アラブ世界がイギリスとフランスによって分割統治下に置かれる
1947	国際連合パレスチナ分割決議	・委任統治領パレスチナをユダヤ人国家とアラブ人国家に分割する決定がなされる
1948	イスラエル独立宣言 第一次中東戦争（～1949 年）	・イスラエルが国連の分割決議よりも多くの土地を取り込んで建国、西岸地区（ヨルダンが併合）とガザ地区（エジプトが統治）が形成される
1956	第二次中東戦争（～1957 年）	・ガザ地区が短期間イスラエルの占領下に置かれる
1964	PLO 設立	
1967	第三次中東戦争	<div> <div>西岸・ガザ地区</div> <div> <div>PNF の設立</div> <div>↓</div> <div>×</div> <div>NGC の設立</div> <div>↓</div> <div>×</div> <div>蜂起の維持</div> <div>↓</div> <div>交渉団の結成</div> </div> <div> <div>PLO</div> <div> <div>政治外交の開始 PLO が西岸・ガザ地区 に対する関心を強める</div> <div>↓</div> <div>PLO への支持が 西岸・ガザ地区で高まる</div> <div>↓</div> <div>ヨルダンとの関係改善 西岸・ガザ地区への具体的な働きかけを行う</div> <div>↓</div> <div>政治外交を活発化</div> <div>↓</div> <div>秘密交渉を実施</div> </div> <div>承認</div> </div> </div>
1970	黒い九月（ヨルダン内戦）	
1973	第四次中東戦争	
1974	PLO 議長アラファートが国連総会で演説	
1976	西岸地区で地方議会選挙（第二回目）	
1978	キャンプ・デーヴィッド合意	
1982	レバノン侵攻・鉄拳政策の開始	
1985	アンマーン合意	
1987	インティファダ開始	
1988	パレスチナ国家独立宣言	
1990	イラクによるクウェート侵攻	
1991	マドリード和平会議	
1993	オスロ合意	
1994	パレスチナ暫定自治政府（PA）発足	本稿が主題とする時代（二重線内）
2000	アル＝アクサー・インティファダ開始	
2008	ガザ地区空爆（～2009 年）	
2011	北アフリカ・中東地域政変（アラブの春） パレスチナ国連加盟申請	
2012	PA が国連総会での「オブザーバー国家」 資格を認められる	
2014	ガザ地区空爆	

（出所）筆者作成

## 序章

君らに僕は呼びかけよう

君らの手を握りしめよう

君らの靴底の下にある大地に口づけし

僕は言う：僕は君らに身を捧げよう

—タウフィーク・ザイヤード<sup>1</sup>

### 問題の所在と背景

1987年12月9日、パレスチナのアラビア語紙に、ごく小さな記事が掲載された。イスラエル軍の車が、パレスチナ人労働者を乗せた車と事故を起こし、4人のパレスチナ人が死亡したという内容である。この事故への抗議をきっかけに、1993年中頃まで続くパレスチナ人の大規模な蜂起が起きた。イスラエルの軍事占領下で暮らすパレスチナ市民が始めた蜂起は、アラビア語で「蜂起」を意味する「インティファダ」(al-Intifāḍa)という名前で、世界的に知られるようになる<sup>2</sup>。重武装のイスラエル軍兵士に路傍の石を投げつけるパレスチナ人青年の姿が国際メディアで注目され、投石がこの蜂起のシンボルとなった<sup>3</sup>。

インティファダは、パレスチナという地域<sup>4</sup>をめぐる諸勢力の政治対立、すなわち「パ

---

<sup>1</sup> 『ザイヤード詩集』(Dīwān Tawfīq Zayyād) より、「君らに呼びかけよう」(Unādikum) [Zayyād 2000]。ザイヤードについては、本稿第二章を参照して欲しい。

<sup>2</sup> 本稿で単に「インティファダ」と述べた場合、これは1987年12月から始まり、1993年9月に終了したパレスチナ市民による大衆蜂起を指す。そのほかに「インティファダ」と一般的に呼ばれる運動として、2000年から始まったアル=アクサー・インティファダ(通称、第二次インティファダ)があるが、こちらは必ず区別して表記した。「インティファダ」という言葉が、本来の意味である「蜂起」という意味で使用されることは、英語や日本語など非アラビア語の文献ではほとんど稀である(数少ない例外として、アルジェリア独立紛争を扱った Hussey [2014] がある程度だと言えるだろう)。

<sup>3</sup> インティファダは、国際メディアの報道によって注目を集めた。インティファダとメディア報道の関係を分析した良著として Cohen and Wolfsfeld [1993] がある。また、Lederman [1992] は、当時インティファダを報道したアメリカのメディアが、パレスチナ人に同情的な報道を行ったことを批判的に述べた書籍である。こうした書籍が著されるほどに、インティファダが国際メディアの報道によって得たものは大きかったと考えるのが妥当だろう。ただし、本稿ではインティファダの展開におけるPLOの政治外交の役割に着目するため、メディア報道については事実関係を記述するに留めた。

<sup>4</sup> パレスチナ (Filasṭīn, Palestine) と称される地理的領域は、イギリスによる「委任統治領パレスチナ」の設立によって、はじめて明確な境界が画定された。有名なバルフォア宣言には、「パレスチナにユダヤ人のための民族的郷土 (national home) を建設すること」と記載されている。その領域は、現在のイスラエル(併合下のゴラン高原を除く)に、東エルサレムを含めたヨルダン川西岸地区、ガザ地区を併せたものにほぼ等しい。

レスチナ問題」(al-Qaḍīya al-Filasṭīniya)<sup>5</sup>の展開において、特筆すべき出来事だった。特に、武器を持たない一般市民がイスラエルの軍事占領に一丸となって立ち向かったこと、その結果としてイスラエル政府とパレスチナ人との直接的な政治交渉が行われたことの二点に注目すべきだろう。この二つは、インティファダ発生までの半世紀近いパレスチナ問題の歴史のなかで、初めての出来事である。

アラビア語でパレスチナ問題は、「パレスチナの<sup>カディヤー</sup>大義」と別に訳すことができる通り、パレスチナという地域で起きた不正に異議を唱える意味を持つ。最初の不正は、1948年に起きたパレスチナ人の故郷喪失(ナクバ, al-Nakba)だろう。すなわち、パレスチナの土地に建国を宣言したイスラエルは、第一次中東戦争<sup>6</sup>で攻め込んだ周辺のアラブ諸国を打ち負かし、アラブ系住民(パレスチナ人)が家屋や財産を残して去った土地を自らの領土とした。このパレスチナ人の故郷喪失と難民化が、パレスチナ問題の原点である<sup>7</sup>。周辺のアラブ諸国は、奪われたパレスチナの土地の解放を訴え、1948年から1973年まで四度の「中東戦争」で、イスラエルに戦いを挑んだ。また、周辺国に離散したパレスチナ人のなかから、故郷の解放のために武器を取り、イスラエルに対する武装闘争を展開するグループが立ち上げられた。こうしたグループが後に参加していった「パレスチナ解放機構」(Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya, Palestine Liberation Organization, 略称:PLO)は、「パレスチナ人民の唯一にして正当な代表」(al-mumaththil al-shar‘ī al-waḥīd li-l-sha‘b al-filasṭīnī)として、パレス

<sup>5</sup> パレスチナ問題には国家間戦争としての性格と、国家对非国家による地域紛争の性格が同時に含まれる。国家間戦争に関しては「アラブ・イスラエル紛争」、地域紛争に関しては「パレスチナ／イスラエル紛争」という呼称が別に存在する。この「スラッシュ、／」に関して、パレスチナ問題研究で著名な臼杵陽(1956-)は、「この曖昧な記号には、『地域』として新たな接合の可能性を開いてくれることへの意図が隠されている」と述べ、二項対立的な敵対関係のみに依拠したパレスチナ問題の認識に疑問を提起している[臼杵 2004: 14]。この地域を総体的に捉える試みとして、日本では人文地理学の立場からこの地域を研究し、「地域としてのパレスチナ」を提起した大岩川和正(1933-1981)による研究を挙げることができる(その評価に関しては長沢[1991]、臼杵[1995]を参照)。また、海外の研究者としてこのような「スラッシュ、／」を使用する人物として、イラン・パペ(Ilan Pappé, 1954-)を挙げることができる。本稿では、「イスラエル」や「ヨルダン川西岸地区」、「ガザ地区」といった領域を含めて、地域の総称を「パレスチナ」とした。また、パレスチナをめぐる政治対立については、アラビア語での呼称である「パレスチナ問題」に統一した。

<sup>6</sup> 第一次中東戦争は、1948年5月から翌年3月まで戦われた戦闘であり、建国宣言直後のイスラエルと、アラブ諸国連合軍(エジプト、シリア、ヨルダン、レバノン、イラク)が戦火を交えた。アラブ諸国軍で最大の勢力であったエジプト軍が効果的な戦闘を行わず、また最高司令官となっていたヨルダン国王アブドゥッラーがエルサレムの確保の他に関心を示さなかったことから、アラブ諸国側の敗北となった。詳細はPappé[1992]を参照して欲しい。

<sup>7</sup> パレスチナ人(Filasṭīnī, Filasṭīniyūn)は、第一次中東戦争の前後までパレスチナと呼ばれた地域に居住していたアラビア語を母語とする人々と、その子孫や親族と自覚する人々である。戦争によって難民化した者、アメリカに移住した者、依然としてイスラエル国内や占領地などに居住を続けた者がこのなかには含まれる。したがって、現在でも国籍上は「イスラエル人」や「アメリカ人」、「ヨルダン人」などに分類されながら、自らを「パレスチナ人」と自覚する数多くの人々がいる。

チナ人による故郷解放運動を率いた。

この構図は、1967 年の第三次中東戦争によってヨルダン川西岸地区（al-Diffa al-Gharbiya, 以下、西岸地区）とガザ地区（Qitā' al-Ghazza）がイスラエルに新たに占領された後もしくはは変わらなかった。当時の PLO を含むアラブ側がパレスチナ解放のために用いる手段は、武装闘争であった。しかし、インティファダが、それまでの紛争のあり方を大きく変えることになる。蜂起を展開したのは市民であり、彼らはほとんど武器を用いなかった（より正確に言えば、彼らは武器を所持する環境にすらなかった）。また、イスラエル政府とパレスチナ人の間で、直接的な政治交渉が公の場で行われたことも、紛争のあり方を大きく変えた。2017 年現在も続けられるパレスチナ暫定自治は、インティファダを経た 1993 年に署名されたオスロ合意（Oslo Accord, Declaration of Principles on Interim Self-Government Arrangements）が実現したものである。占領下に 20 年置かれたパレスチナ市民は、なぜインティファダを 1987 年という年に開始することができたのだろうか。この問いに取り組む最も平易な方法は、先ほど挙げたインティファダの二つの特徴がなぜ成立したのかを分析することである。すなわち、蜂起への市民の参加と、政治交渉の実現がいかなる歴史的背景のもとで生じたのかを検討することが、インティファダの発生と展開を説明することに繋がるのである。

**表 0-1 インティファダの各年における展開**

	西岸・ガザ地区での出来事	その他の出来事
1987 年（12 月-）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インティファダ発生（12 月）</li> <li>・ハマース設立（12 月）</li> </ul>	
1988 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統一指導部によるリーフレット発行が始まる（1 月）</li> <li>・ベイト・サーフルで納税拒否（7 月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PLO 幹部アブー・ジハードがチュニジアで暗殺される（4 月）</li> <li>・PLO がパレスチナ独立宣言を発表する（11 月）</li> <li>・国連でアラファートが演説</li> </ul>
1989 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インティファダでの死者が 500 人を超える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PLO 国民憲章の改訂にアラファートが言及（5 月）</li> <li>・エジプトやイスラエルによる事態打開の提案が続く（3 月～9 月）</li> </ul>
1990 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファタハとハマースのあいだで合意文書が結ばれる（9 月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・湾岸危機が始まる（8 月）</li> </ul>
1991 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファタハとハマースの衝突危機が回避される（9 月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マドリード和平会議開催（10 月）</li> </ul>
1992 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハマースのメンバーなどイスラーム主義者 400 人以上の一斉追放</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マドリード和平プロセスの展開</li> </ul>
1993 年（-9 月）		<ul style="list-style-type: none"> <li>・オスロ合意（9 月）</li> </ul>

（出所）筆者作成

具体的な議論に入る前に、パレスチナ問題を扱った研究のなかで、インティファダがどのように評価されてきたのかを改めて整理しておこう。特にパレスチナ問題全体のなかでインティファダを位置づける際、多くの研究者はインティファダを積極的な側面から論じる傾向にある。蜂起が始まった初期の頃の報道や研究<sup>8</sup>では、規模のあまりの大きさに驚嘆が示された。特に注目されたのが、蜂起のなかで住民に統一行動を呼びかけた「インティファダ統一民族指導部」(al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwahḥada li-l-Intifāḍa, 以下、統一指導部)の存在である。統一指導部は、月に数回リーフレット(政治声明)を占領下の各地域に配付し、ストライキやデモの日程を、占領地全域で統一することに成功した。自らの関与を公言するサリー・ヌサイバ(Sarī Nusayba, 1949-)を除けば、統一指導部は実際に参加した人物についてすら未だに多くのことが明らかになっていない、謎めいた組織であった(こうしたミステリアスな側面も手伝い、パレスチナ人も所属党派を超えてインティファダを高く評価する傾向が強い)。さらに、より暴力的な蜂起(アル=アクサー・インティファダ<sup>9</sup>と呼ばれる)が2000年9月に起きてからは、これと比較してインティファダを「非武装・非暴力」の運動として再評価する動きも見られる<sup>10</sup>。しかし、オスロ合意から始まる和平交渉が破綻寸前とまで言われる現在において、インティファダを依然として高く評価し続けることは妥当なのだろうか。このような疑問を呈するのは、次のような厳しい現実があるからである。2000年9月の交渉決裂とそれに続く暴力によって、オスロ合意から始まった和平の枠組みは、その根底を問い直されている。合意によって占領から解放されるはずだった西岸地区では、イスラエル入植地の建設が続き、東エルサレムではイスラエルによる一方的な併合状態が続いている。一方のガザ地区では、2007年半ば頃からイスラエルによる経済封鎖が敷かれ、2008年、2012年、2014年と、大規模な軍事攻撃が行われた。これに対し本稿で扱っていく1967年から1993年までの時代には、こうし

<sup>8</sup> McDowall [1989] や Peretz [1990]、Schiff and Ya'ari [1990] を典型として、日本語によるものでは小田原・村山 [1989] や高木 [1989]、森戸 [1990] を挙げることができる。また、翻訳書ではあるがエマソン [1991] やゴイティソーロ [1997] の前半部分もこれに含まれる。

<sup>9</sup> アル=アクサー・インティファダ(Intifāḍa al-Aqṣā)は、2000年9月末から東エルサレムを中心に、西岸・ガザ地区で発生した衝突である。これを「第二次インティファダ」と呼ぶことで、本稿が主題とするインティファダを「第一次インティファダ」と呼ぶ場合もある。アル=アクサー・インティファダは、パレスチナ人武装組織がイスラエル国内で爆発物を用いた軍事作戦(日本のメディアでは「自爆テロ」と総称された)を行い、イスラエルは戦車や戦闘用ヘリコプターによる軍事侵攻を西岸・ガザ地区に対して行った。そのためこの事件では、全体で4000人を超える犠牲者が出ている。本稿では、「第一次インティファダ」や「第二次インティファダ」とは表記せず、あくまで「インティファダ」という言葉を、1987年から1993年までの蜂起に限定して用いる。

<sup>10</sup> King [2007] や Pearlman [2011] を典型とする。また、非暴力運動の有効性を、インティファダを事例として加えながら論じた Chenoweth and Stephan [2011] もこの類型に含めて良いだろう。

た大規模な軍事行動が行われたことはない。

こうした批判的な評価も可能である点を踏まえながらも、本稿では現在の状況に対し他の視点に依って、より積極的にインティファダを位置づけることを試みたい。つまり、2011年の「アラブ革命」<sup>11</sup>によって中東地域における大衆運動や蜂起への注目が高まるなかで、インティファダをその先駆けとして評価することができるという点である。大衆運動が地域秩序を変える（少なくとも動揺させる）という点では、2011年にチュニジアやエジプトを始めとする中東各地で見られた「アラブ革命」と通底する性格を、インティファダは持っているのではないか。この点で、インティファダの検討は、現在の中東における市民を主軸とした政治展開を理解する糸口となるだろう。

こうした今日的関心を含めて、本稿ではインティファダの発生に至る過程、そして蜂起の展開、帰結を分析し、インティファダを改めてパレスチナ問題全体、さらには中東の近現代史全体のなかに位置づけていきたい。

## 先行研究と課題

インティファダを対象とした研究は、およそ三つのグループに分けることができる。すなわち、インティファダの発生にパレスチナ社会の変容を読み取るもの<sup>12</sup>、イスラエルによる占領政策を主な要因として提示するもの<sup>13</sup>、パレスチナ社会内部で（結果的に見れば）蜂起を準備した要因を明らかにしようとする取り組みのもの<sup>14</sup>である。本稿における分析は、このうち最後のグループに最も近い。したがって、このグループを代表する二つの研究を取り上げ、残された疑問や課題を提示したい。

ヨースト・ヒルターマン（Joost Hiltermann, 1956-）による研究は、インティファダに人々が参加した背景として、占領下で発展した労働運動や女性団体の活動の歴史を分析した〔Hiltermann 1991〕<sup>15</sup>。政治的な党派のもとで組織化された人々が、インティファダの

---

<sup>11</sup> 2011年初頭から始まったチュニジア、エジプト、イエメンでの政変と、それに続くリビア、シリアなどでの内戦状態によって、中東地域の地域秩序は大きく動揺した。本稿で示す中東諸国による動きは、この「アラブ革命」の前段階にあたる地域秩序の形成過程をたどることになる。

<sup>12</sup> 典型としては Lockman and Beinin [1989] や Nassar and Heacock [1990] といった編著に含まれる複数の論考、さらに日本語では古居 [1996] や翻訳書のマンスール [1993] を挙げることができる。

<sup>13</sup> 基本的にインティファダに関する多くの論考や研究がイスラエルの占領政策による影響を指摘するが、特にその点を強調したものとしては、Aronson [1990] や Beitler [2004] を挙げれば十分だろう。

<sup>14</sup> Hiltermann [1991] と Alimi [2007] を典型とする。本稿の分析は、この類型に当てはめることができる。

<sup>15</sup> ヒルターマン自身は指摘していないが、中世ヨーロッパの都市で起きた暴動のなかにも、行政区画や手工業者の組合が運動の組織となった例が指摘されている〔モラ、ヴォルフ 1996: 333-334〕。ただし、後の脚注で述べるとおり、本稿ではこうした「都市暴動」とインティファダを同じ運動とは捉えない立

大衆行動を支えていたと指摘するこの研究は、現在でも参照に値する。彼の言葉を借りれば、ライバル関係にあった党派のあいだで起こった「組織設立戦争」(war of the institutions)が、人々の組織化と政治的な目覚めをインティファダより以前に実現していた[Hiltermann 1991: 49, 65]。このヒルターマンの研究によって、インティファダをパレスチナ人住民の単なる「不満の噴出」として捉える単純な見方は否定された。もちろん、若者に限らず女性や子どもまでも路上に繰り出し、銃器で武装したイスラエル兵に投石する姿に、占領下で生きた人々の強い怒りを見ることができる。しかし、その一方でヒルターマンが指摘したのは、そうした人々の行動の背景には、組織化され、政治的な目的をもって作り上げられた人々のネットワークが存在していたという事実である<sup>16</sup>。それは、社会学で言う「抗議の政治」(Contentious Politics)であり、社会運動論の言葉を借りるならば、彼の研究はインティファダという抗議活動の「資源」(resource)を示したことになる。

このヒルターマンの研究とは別に、「なぜあの時期にインティファダは発生したのか」という問題に取り組んだのが、エイタン・アリミ (Eitan Alimi, 1969-) による研究である[Alimi 2007]。アリミは、ヒルターマンを含めた先行研究で指摘されてきた「抵抗の意志」(willingness)と「実際の準備」(readiness)の他に、「行動の契機」(opportunity/ies)がインティファダの分析には不可欠だと提唱した。彼は明確に社会運動論の分析枠組みに依拠して分析を展開し、イスラエルの国内世論との関係性が、インティファダ発生之谜を解く鍵であると指摘している。アリミが採用したのは、社会運動論のなかでも「政治的機会」(political opportunities)と呼ばれる分析枠組みである。これは、行動主体にとって何らかの「機会」(好機)が訪れることによって、抗議活動が開始されるとする見方であり、ヒルターマンの研究を分類することができる「資源動員論」(resource mobilization)と並んで、社会運動や抗議活動を合理的判断に基づいた政治行動として分析する点に特徴がある。アリミの分析は、平和運動の盛り上がりでイスラエルの国内世論が分裂する時代を政治的機会としてインティファダが始まったと論じた。

以上の二つの研究に批判を述べるとするならば、インティファダに注目するあまり、それ以前の20年間に占領下で展開された政治活動を十分に分析せず、またパレスチナ人全

---

場をとる。

<sup>16</sup> 政治的な目的が明示され、かつ参加者の運動への参加が組織化されていた点から、インティファダは近代から現代にかけて各地域で見られた「都市暴動」とは異なる性格を持っている。特に、「都市暴動」に付随しがちな「熱狂」や「狂乱」といった要素を5年間に亘ったインティファダに見出すことは難しい。本稿で、「暴徒」や「暴民」、「狂信者」といった言葉を本稿で用いないのは、インティファダが政治運動としての性格を色濃く持っていることを強調するためである。

体の政治活動のなかにインティファダを位置づけていない点が問題となる。後に明らかにしていくことになるが、インティファダの帰結までも分析の対象に含める場合、この運動の発生以前から続けられてきた占領地内部での政治活動の発展と、PLO による政治的取り組みの検討は不可欠である。また、インティファダが原則的に占領への抗議運動である以上、イスラエルによる占領の開始を分析の出発点とするのが望ましいだろう。もちろん、これらの批判は、両者の研究の発表された時期や理論的枠組みを考慮すれば、やや厳しすぎるものかもしれない。ヒルターマンの研究はインティファダが展開するなかで発表され、まさにインティファダそのものを説明することが必要とされた時代的要請に答えたものである。したがって、労働運動や女性団体の活動との連続性をその時代にあっても明らかにしたことは、むしろ優れた成果であった。また、アリミの採用した社会運動論は、運動の発生のメカニズムについて多くの知見をもたらすものの、運動の帰結に関してはあまり関心を払わない傾向にある。この点は、社会運動論を扱う研究書でも繰り返し指摘されてきた [McAdam, Tarrow and Tilly 2001; della Porta and Diani 2006; Goodwin and Jasper 2009]。したがって、運動が発生する以前の（一見するとインティファダの発生と無関係に見える）諸活動を分析の対象としないこと、またパレスチナ人の政治活動全体のなかにおけるインティファダの位置づけについて十分に論じていないことは、彼らの研究の価値を減ずるものではない。しかし、発生から 30 年近くを経た現在、インティファダをパレスチナ問題の歴史的発展の文脈のなかに位置づけ、その帰結までを含めた分析が求められていることは言うまでもない。

インティファダとは別のパレスチナ人の政治活動を扱った研究を繙けば、インティファダがパレスチナ問題の歴史のなかに十分に位置づけられていない課題がより明らかになる。インティファダ以前の西岸・ガザ地区における政治活動を扱った研究として、モシェ・マオズ (Moshe Ma'oz, 1935-) による政治エリート研究をまず挙げることができる。マオズは、特に西岸地区においてヨルダン王室と強い繋がりを持つ伝統的指導者に PLO 支持を掲げる若手世代が挑戦し、1976 年の市議会選挙で勝利する様子を明らかにした [Ma'oz 1984]。本稿の第二章の内容は、この研究成果に多くを依拠している。そのほかにも、イスラエルの占領政策を扱った Manşūr [1990]、池田 [1990]、al-Naqīb [1997]、Efrat [2006]、マオズと同じように指導者層に着目した Migdal [1980] や Sahliyyeh [1988]、al-Jarbāwī [1989]、Pappe [2010]、そしてナショナリズム運動を扱った、al-Dajjānī [1988] や al-Qashṭīnī [1990]、立山 [1990]、al-Az'ar [1991]、Craissati [2005]、Jamal [2005]、Qumsiyyeh [2011] など、



注目すべき研究があり、それぞれ本稿の関連する箇所に取り上げている。しかし、いずれも一部には研究の行われた時期の問題から、また一部には対象とする事象の問題から、インティファードとの連続性にまで十分に議論を発展させていない。

この点は、占領地の外で展開されたパレスチナ人の政治活動（当時の文脈から言えば「武装闘争」と述べた方が良いだろう）に関する研究も同じである。一例として、ヤズィード・サーイグ（Yazīd Sāygh, 1955- ）による大著や、日本語では藤田進（1944- ）による研究を挙げれば十分だろう〔藤田 1989; Sayigh 1997〕<sup>17</sup>。PLO そのものが展開した武装闘争や、PLO に集ったファタハ（「パレスチナ解放運動」〔Ḥaraka al-Taḥrīr al-Waṭanī al-Filasṭīnī〕の略称）や「パレスチナ解放人民戦線」（al-Jabha al-Sha'bīya li-Taḥrīr Filasṭīn, Popular Front for the Liberation of Palestine, 略称：PFLP）、「パレスチナ解放民主戦線」（al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya li-Taḥrīr Filasṭīn, Democratic Front for the Liberation of Palestine, 略称：DFLP）といったさまざまなゲリラ組織による活動は、アラビア語で「サウラ」（al-Thawra）と呼ばれた。「革命」を意味するこの言葉は、「パレスチナ革命」（al-Thawra al-Filasṭīnīya）の略称としてパレスチナ人ゲリラの自称としても用いられる<sup>18</sup>。サーイグは、武装闘争の歴史から、1994 年の暫定自治区設立までの時代を読み解き、藤田はこの武装闘争がパレスチナ人の政治的目覚めにつながったことを指摘している。これに対し、本稿が主題とするインティファードは、これらの武装闘争にほとんど参加することがなかった人々、すなわちイスラエル占領下の西岸地区とガザ地区に暮らした普通の市民が実現したものである。一見すると関係しない両者は、「サウラ」を主題とした多くの先行研究でも別のものとして扱われることが多かった。

こうした先行研究の課題を改めて述べれば、インティファードに着目した研究は、それ以前の歴史的展開を捨象する傾向にあり、一方でインティファード以前の占領地に着目した研究はインティファードとの繋がりを十分に検討していない。さらに、「サウラ」の文脈のなかに、インティファードが位置づけられることも十分には行われて来なかった。こうした課題を踏まえれば、インティファードを中心としたパレスチナ人による政治活動の全

<sup>17</sup> PLO 内部のさまざまなゲリラ組織による連合や権力抗争については、次の研究にも詳しい。Cobban [1984]、Gresh [1985]、Sahliyah [1986]、Shemesh [1988]。

<sup>18</sup> 「パレスチナ革命」の全体的概観に関しては臼杵 [2005] を、イギリス委任統治時代以降からインティファード直前までのパレスチナ解放運動の歴史的考察に関しては藤田 [1989] を参照。アラビア語で「革命」を意味するサウラという言葉には、フランス革命のような国家体制の転換の意味に加え、そのような事態を目指して集団で行動するという意味が含まれる〔バラカート 1991: 93〕。パレスチナ問題における「サウラ」という言葉の使用は、本文中で少し言及した通り、運動そのものに加えて運動体（すなわち、パレスチナ人武装組織）を総体的に指す場合にも見られた。

容を扱うための、新たな分析枠組みが必要であることは明らかだろう。フランス革命と 18 世紀イギリスの労働争議を比較研究したジョージ・リュージェ (George Rudé, 1910–1993) は、運動を展開する群衆が先にあり、その群衆が外部の「英雄」を運動のなかに招集したり、または群衆のなかから「その言葉の広く受け入れられている意味での指導者よりもむしろ、一時的に熱狂に負けてしまい、仲間よりも勇気、冒険心、または冒険的気性を示し、スローガンを叫ぶのを聞かれてしまい、かなりはなばなしい暴力を行使した者か、または隣人たちによってたまたま探し出されたり密告されたりした者」が指導者として現れると指摘した [リュージェ 1982: 309–315]。現代の大衆蜂起と 18 世紀の運動は、もちろん同列のものとして扱うことはできない。それでも、リュージェの指摘はインティファダの展開を見る限りで参照に値する。インティファダにおいて外部から招集された「英雄」とは PLO であり、群衆のなかから現れた指導者とは、統一指導部に集ったような匿名の者たちであった。インティファダで興味深いのは、PLO はすでに 1970 年代中頃から占領地の人びとに「招集」されていたという事実である。この点からも、インティファダを分析するためには、時代を大きく遡る必要があることは明らかだろう。

### 作業課題と分析の方針

ここで、インティファダと並んで、本稿で特に注目する言葉を提示したい。それが、「スムード」(al-Ṣumūd) という言葉である。インティファダと比べれば非アラビア語圏での認知度は低いですが、インティファダ以前の西岸・ガザ地区で展開された政治活動は、概してこのスムードという言葉で呼ばれた。スムードとは、すなわち「忍耐強くあること」を意味するアラビア語であり、占領下に置かれたパレスチナ市民の不退転の意志や行動を表す。ごく普通の市民であった彼らは、占領政策を担ったイスラエル軍に非武装で対峙せざるを得なかった。世界的に知られたパレスチナ人の武装闘争は、周辺アラブ諸国に離散した難民たちのあいだから、しかも第三次中東戦争をきっかけとして始められたものである。この武装闘争が、サウラと称されたことはすでに述べた。一方、この第三次中東戦争で占領され、イスラエルの厳しい管理下に置かれた西岸・ガザ地区では、そうした武装闘争への支持や期待こそ見られたものの、実際に市民が武装闘争に参加することは稀であった。移住や転居を拒み、占領に耐える人々が自らの行動の自称として用いたのが、スムードという言葉である。スムードは、定冠詞 (al-) を付けて徐々にイスラエル占領下に生きるパレスチナ人の意志や行動を指す言葉 (固有名詞) として定着していった。

本稿で特に着目するのは、スムードとインティファダ、そしてサウラはどのように連関し、どの程度の連続性（または断絶）を持っていたのかという点である。インティファダでは、青年にくわえて女性や子ども、老人を含めて、地域の人々のほとんどすべてが蜂起に立ち上がった。店を持つ者はストライキを行い、若者や学生は唯一の武器となった石を投げることで、イスラエル当局に対決を挑んだ。インティファダは20年にわたるスムードが変質した姿なのか、またはスムードとは別の背景をもって発生したものなのか。さらに、この占領地内部での動態に、サウラを率いた PLO はどのように関与したのか。こうした本稿の議論を進めるために、具体的な作業課題を二つ挙げたい。この二つの課題は、すなわちスムードからインティファダへの時代の変化を、占領地内部とパレスチナ人全体という二つの異なる視点から分析するものである。

第一に、西岸・ガザ地区における非武装の政治活動はどのように発展し、インティファダを迎えたのかという、地域内部の動態を明らかにする必要がある。インティファダで、統一指導部が注目されたことはすでに述べた。この組織は、それ以前に占領下で活動したあらゆる政治組織とも名称が異なり、さらには関係する人物については現在わかっている以上に当時は不明であった。それにも拘わらず、統一指導部は人々から信頼を獲得し、蜂起を統一的な行動のもとに展開することに成功した。なぜ、占領下の人々は、見ず知らずの組織によるリーフレットの指示に従ったのだろうか。第一部では、この課題に取り組んでいく。少し議論を先取りして述べれば、占領下の政治活動は、時代を経るごとに個人ではなく、個人を特定されないように組織が率いるように変化していった。その変化のなかで、占領下の社会に確立されていった行動原則について明らかにしていく。

第二に、PLO が展開した外交戦略と西岸・ガザ地区の政治活動がいかなる関係にあったのかという点を明らかにする。先に挙げた第一の課題が占領地内部を中心に捉えるものであるとすれば、こちらは PLO による活動を含めたパレスチナ人の運動全体のなかで、西岸・ガザ地区において展開されたさまざまな活動を検討するものである。本稿の第二部では、この課題に取り組んでいく。ここでも議論を少し先取りすれば、インティファダの展開において、PLO の関与は不可欠であった。言い換えるならば、西岸・ガザ地区における政治活動に強い関心を向けるようになっていた PLO は、インティファダに不可避免的に関与せざるを得なかった。この点を明らかにするためには、PLO がどのような利害関心から西岸・ガザ地区への関与を強めていったのかを明らかにする必要がある。第二部では PLO の動きを分析に含めることで、パレスチナ人が展開した政治運動の全体のなかにインティフ

アードを位置づけていく。

実際の分析に際して、本稿では多数のアラビア語資料を参照した。地域研究の方法論について深くは立ち入らないが、本稿では安易に既存の理論を分析の枠組みとして用いるのではなく、現地語の資料から読み取ることが出来る事実や因果関係を重視している<sup>19</sup>。膨大な一次資料の参照において指針とするのは、現地の研究者によって現地の言葉で書かれた数々の研究である。地域の文脈に即して編まれた研究や論説のなかには、欧米や日本の人文社会研究が用いない言葉や分析概念が時に含まれる<sup>20</sup>。また、時には既存の概念が拡大解釈されて用いられる場合もあるが、むしろそれは現地の事情に即したものであることが多い。本稿の例で述べれば、「抵抗」(al-muqāwama)という言葉は、現地の研究ではより幅広い対象を指す言葉として用いられる。たとえば、第三章で取り上げるある研究は、団体組織の設立や映画の公開などの教育文化活動も「抵抗」として分析の対象に加えていた。すなわち、教育文化活動や組織の設立そのものすら政治活動の文脈で捉えることが可能であると、現地の研究者による記述は示している。こうした研究成果にも、本稿の分析は多くを依拠した。

## 依拠する資料と情報

最後に、本稿が特に依拠したアラビア語資料について概説しておきたい。本稿で特に参照した資料は、新聞や雑誌などの定期刊行物、一般刊行資料、研究所などが保管する未刊

---

<sup>19</sup> 地域研究の方法論に関しては、地域研究独自の方法論を模索するものや、他の社会科学の理論との融合を提唱するものが注目されている。この議論に関するものとしては、一例として山口 [1991]、板垣 [1992]、京都大学地域研究コンソーシアム [2012]、武内 [2012]などを挙げることができる。板垣雄三 (1931-) による指摘を参照すれば、「地域研究という基礎学、すなわち世界の具体的知識の集積・整理、そこからたえず出発しなおす一般理論化、総合体系化、構造的精緻化の営為を土台にして、その上に個別的・特殊的専門分野の研究作業と研究成果とが析出してくるのである」と述べられ、地域の研究を出発点とすべきであるとの提言がなされている [板垣 1992: 425-426]。一方で、社会科学の分野でも、事例研究の意義やそのあり方を提言する議論が活発化している。邦訳のあるものを挙げれば、キング、コヘイン、ヴァーバ [2004]、ヴァン・エヴェラ [2009]、ジョージ、ベネット [2013]などを示せば十分だろう。本稿の議論は、こうした事例から出発するタイプの研究設計に、大いに影響を受けている。

<sup>20</sup> 地域特有の概念は、研究が対象とする地理的領域を指定する作業にも関係する。現代エジプト研究者の長沢栄治 (1953-) は、「あらゆるイデオロギーの影響を排した地域概念の設定、客観的で科学的な地域概念の設定は、おそらく不可能であろう」と指摘する。これに続いて長沢は、「むしろ社会科学もそこに含まれるが、人文学的な学問として行なわれる地域研究にとって、自地域研究と他地域研究とのたえざる対話を通じて、それぞれの研究目的に応じた地域概念の設定を行なうしかないということであろう」と提起した [長沢 2013: 148]。こうした地域設定の視点も、本稿に重要な視座を与えている。本稿では西岸・ガザ地区を主な対象地域とするが、一方で西岸・ガザ地区の人々がどのように地域を捉えていたのかという視点を得ることによって、分析の範疇は PLO が外交戦略を展開する中東全域や国連など、その時代に応じて拡大、縮小する構成となっている。

行資料の三点である。特に説明の必要な資料に関しては、各部の冒頭でも説明するため、詳細についてはそちらも参照して欲しい。さらに加えて、筆者による関係者へのインタビューも、重要な情報源として各所で利用している。

第一に、定期刊行物としては、占領下で発行されていたアラビア語の日刊紙を参照した。占領下の西岸・ガザ地区では『シャアブ』紙 (*al-Sha‘b*, 民衆) と『ファジュール』紙 (*al-Fajr*, 夜明け) が発行されており、両紙は PLO 支持の姿勢で有名であった。同じ 1972 年に創刊された両紙は、西岸・ガザ地区における政治活動の躍動する姿を伝えてくれる (前者は 1992 年、後者は 1993 年に廃刊となった)。たとえば、1976 年の市議会選挙で『ファジュール』紙は、PLO 支持派の候補を全面に掲げて、「彼らを選ぼう」と大胆に呼びかけを行った (本稿第二章・写真 2-1)。もちろん、そのような報道姿勢や編集方針によって、両紙はたびたびイスラエル占領当局から発行停止処分を受けている。本稿では、この二紙に加え『クドゥス』紙 (*al-Quds*, エルサレム) も多く参照した。この新聞は、当時はヨルダン支持の論陣を張ることで有名であり、占領下で発行された三紙のなかでは唯一現在まで発行が続いている<sup>21</sup>。これら三紙のいずれもが、本稿が着目する 1970 年代から 1980 年代にかけてのものがマイクロフィルムの形で、国内外の研究機関に保管されている。

第二に、刊行資料に関しては、さらに細かく研究機関による刊行資料、政治党派による刊行書籍、個人の回顧録に分けて紹介したい。まず、研究機関による刊行資料としては、1965 年から 1981 年まで各年版が刊行されている『パレスチナ・アラブ文書集』 (*al-Wathā‘iq al-Filasṭīniya al-‘Arabīya*, PAD) と、1979 年から 1994 年まで各年版がある『アラブ統一日誌・文書集』 (*Yawmīyāt wa Wathā‘iq al-Waḥda al-‘Arabīya*, WA) を参照した。実際に引用する際には、略記と版の年度、そして収録番号 (no. ) を付して表記する。PAD は各年版が 500 ページを超える比較的大規模な資料集であり、パレスチナ問題に関する国際的取り決めや外交アピール、アラブ諸国指導者の発言、PLO 関係者のインタビュー、各地域の諸団体からの声明文など総計 8000 点以上が収録される<sup>22</sup>。この資料を発行したパレスチナ研究機構

<sup>21</sup> 『クドゥス』紙の刊行は、1951 年に開始されている。

<sup>22</sup> PAD の年度ごとの収録数には隔たりがあり、最多は 1970 年版 (1972 年発行) の 991 点、最少は 1976 年版 (1978 年発行) の 186 点である。このアラビア語シリーズと並び英語版の『パレスチナ国際文書集』 (*International Documents on Palestine*) も刊行されるが、両者の収録数には隔たりがあり (例えば 1978 年版ではアラビア語版に 508 本、英語版に 343 本が収録される)、特にアラビア語で発せられた政治声明に関しては抜粋訳が多いことから、アラビア語による PAD を本稿では参照した。これと類似した文書集として『パレスチナ文書集』 (*al-Wathā‘iq al-Filasṭīniya*) シリーズが、2006 年版からベイルートの「ザイトゥーナ研究諮問センター」 (*Markaz al-Zaytūna li-l-Dirāsāt wa al-Istishārāt*) から刊行され、2017 年現在までに 2009 年版までの 4 巻が入手可能となっている。

(Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, Institute for Palestine Studies) は、1963 年にレバノンの首都ベイルートに設立された独立研究機関であり、英語の『パレスチナ研究ジャーナル』(*Journal of Palestine Studies*) を代表として、数多くの雑誌や書籍を発行している。同機構からは、1964 年から 1976 年までの各年版がある『パレスチナ問題年鑑』(*al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīniya*) も発行されており、こちらも適宜参照した。一方で、後者の WA を刊行したのは、同じくベイルートに拠点を置く独立研究機関のアラブ統一研究センター (Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya) である<sup>23</sup>。アラブ世界で数少ない政治学雑誌『アラブ政治学誌』(*al-Majalla al-‘Arabīya li-l-‘Ulūm al-Siyāsīya*) を刊行する研究所であり、発行する研究書には定評がある。1980 年代の政治文書については、その大部分を WA に依拠した。この二つの資料の詳細については、各部の冒頭で補足して説明したい。

パレスチナ人の党派や組織が自ら発行する書籍やパンフレットも多くのことを教えてくれる。最も代表的なものとしては、PLO の下部組織である「パレスチナ百科事典 (編纂) 機構」(Hay’a al-Mawsū’a al-Filasṭīniya) によって刊行された『パレスチナ百科事典』(*al-Mawsū’a al-Filasṭīniya*) を挙げることができよう。1984 年の第一部はその名の通り項目順の辞典であるが、1990 年に刊行された第二部は、研究者や実務者による論説集となっている。資料も豊富に掲載されるため、重要な情報源として参照した。こうした資料集の出版は、パレスチナの政治党派にとっては珍しいことではない。例えばインティファダの関連文書の一部には、党派によって後に書籍として出版されたものが数点確認できる<sup>24</sup>。また事件や記念日、集会のための資料として刊行されるパンフレットや小冊子なども、貴重な情報を含む資料である。

こうした党派系の出版と性格がよく似たものとして、個人による回顧録や指導者を対象にしたインタビュー資料が挙げられよう。特に、ハマース (「イスラーム抵抗運動」[Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya] の略称) 創設者のアフマド・ヤースィーン (Aḥmad Yāsīn, 1937–2004) や、エルサレムのシャリーア控訴裁判所 (Maḥkama al-Isti’nāf al-Shar‘īya) の元首席判事アブドゥルハミード・サーイフ師 (‘Abd al-Ḥamīd al-Sā’ih, 1907–2001)、PLO の幹部ハーリド・ハサン (Khālīd al-Ḥasan, 1928–1994)、PLO の軍事組織「パレスチナ解放軍」(Jaysh

<sup>23</sup> WA は、ベイルート・アメリカン大学から 1963 年から 1981 年まで刊行された『アラブ文書集』(*al-Wathā’iq al-‘Arabīya*) と同じように、アラブ諸国全域を対象とした文書資料集である。

<sup>24</sup> 政治党派によるインティファダに関する出版物には、次のものがある。

Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya [1989]、al-Qiyāda al-Waṭaniya al-Muwahḥada [1990]、Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya [1990]。

al-Taḥrīr al-Filasṭīnī) <sup>25</sup>の総司令官であったアブドゥッラザーク・ヤヒヤー (‘Abd al-Razzāq al-Yahyā, 1929–)、インティファダのなかで有力な指導者と目されたサリー・ヌサイバとハナーン・アシュラーウィー (Ḥanān ‘Ashrāwī, 1946–) のものを参照した [Ashrawi 1995; al-Ḥasan 1985, 1994; Maṣṣūr 2003; Nusseibeh 2007; al-Sā’ih 1994; al-Yahyā 2006]。また、その他の人物の回顧録も必要に応じて部分的に参照する (al-Khaṭīb [1989]、Suwayd [1998]、al-Fāhūm [1999]、Mish‘al [2006] など)。それぞれの人物については、分析のなかで言及する際にあらためて説明したい。

第三に、本稿が依拠する資料として、インティファダのなかで配布されたリーフレットを典型として、研究機関や図書館が保管する文書資料を挙げることができる。Legrain [1991] や Mishal and Aharoni [1994] など、リーフレット資料の編纂と刊行は幾度か試みられてきた <sup>26</sup>。しかし、前者は 1988 年末までの記録に留まり、後者は英訳として参照の簡便さがあるものの一部に出典の不明や記載の不備が見られる <sup>27</sup>。日本語訳も存在するが、原典の併記がないために研究資料としての利用には慎重にならざるを得ない [パレスチナ蜂起統一民族指導部編 1993]。本稿では、西岸地区北部の都市ナーブルスの市立図書館資料室に保管されていた原本資料を参照した。筆者の調査の限り、先行研究でこのナーブルスの資料を分析したものは見られない。この資料の特徴は、既存の刊行物が収録していない地方版のリーフレットを含む点、さらに収集時期が 1987 年末から 1994 年初頭までと長期にわたる点であり、この点でまさに分析に値する。もちろん、地方図書館収蔵の資料であるという面では、分析に際して慎重にならざるを得ないが、Ṣālih [1990] をはじめとするアラビア語によるリーフレット分析の論文を手掛かりに、筆者はナーブルスの資料の検討を

<sup>25</sup> パレスチナ解放軍は、エジプト、ヨルダン、イラク、シリアに部隊を展開し、第四次中東戦争ではエジプト軍側で参戦している。パレスチナ暫定自治政府が設立された後に、パレスチナ解放軍の多くの幹部は暫定自治政府の治安要員となって西岸・ガザ地区に帰還しており、現在では事実上の解散状態にある。

<sup>26</sup> インティファダのリーフレットについて、アラビア語原本が参照できる資料としては次のものがある【巻末資料 6 も参照】。

Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya [1989]、Anonymous [1989]、al-Qiyāda al-Waṭaniya al-Muwaḥḥada [1990]、Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmiya [1990]。

また翻訳（英語、フランス語、日本語）は次のものがある。

Lockman and Beinun [1989]、Legrain [1991]、パレスチナ蜂起統一民族指導部 [1993]、Mishal and Aharoni [1994]。

くわえて、ウェブサイトで公開されるものには、次のものがある。

WAFA（パレスチナ情報報道局）ウェブサイト、Birzeit University Palestine Archive ウェブサイト。

その他に、オランダの国際社会史研究所（International Institute of Social History, IISH）の所有するコレクションも参照に値する。本稿のための参照にあたっては、ウェブサイトを通じたレファレンス・サービスを介して、PDF での閲覧を行った。

<sup>27</sup> Mishal and Ahroni [1994] では、ハマースの第 1 号リーフレットとして訳出されるものが、他の資料のいずれのものとも異なっている。詳細は鈴木 [2015a] を参照して欲しい。

行い、分析に耐えうる資料であると結論づけるに至った [鈴木 2015a]。具体的な分析については、第五章と第六章を参照して欲しい。

最後に上記のようなさまざまな文書資料の内容を判断するうえで、個人へのインタビューは欠かせない。現地でのビデオ撮影と録音により収集した個人のインタビューには、1976 年選挙で当選した市長のバッサーム・シャカア氏 (Bassām al-Shak‘a, 1930– ) や、1980 年代に難民キャンプでファタハ系の青年の動員を担当していたタイスィール・ナスルッラー氏 (Taysīr Naṣr Allāh, 1961– )、インティファードの指導部に近しかったとされる元若手幹部のアター・カイマリー氏 (‘Atā al-Qaymarī, 生年不明) も含まれ、文章資料と照合することで、より具体的な政治活動の姿を捉えることが可能となった。ただし、先行研究や刊行資料で提示された事実を大きく覆す証言はなく、あくまで個別の事実を補足する形で参照するに留まっている。

## 本稿の構成

本稿は、二部によって構成される。第一部の三つの章では、西岸・ガザ地区内部における政治活動の発展について、特に 1970 年代を中心として検討を加える。そして第二部の三つの章では、PLO の外交戦略の展開という視点を加えて、1980 年代を中心として分析を行っていく。それぞれの章の内容を、大まかに紹介しておきたい。

第一部では、占領下に生きた人々の視点から 1970 年代を中心に分析を行い、占領下で個人ではなく組織が政治活動を担うようになるまでを見る。本稿の分析の軸となる二つの言葉のうち、スムードの時代を主に扱うのがこの第一部である。また、先述した取り組むべき二つの作業課題との関係で言えば、第一の西岸・ガザ地区における政治活動の歴史的発展を明らかにするなかで、第二の関心である PLO の外交戦略との関係にも部分的に光を当てる構成となっている。

第一章では、占領直後の東エルサレムの併合をめぐる抗議活動にはじまり、経済的理由を背景として占領下で最初の蜂起が起きるまでを分析する。そして第二章では、こうした占領下の運動が、PLO 支持を公然と表明する指導者のもとで発展し、1978 年のキャンプ・デーヴィッド合意を経て、独自の行動原則を確立していく様子を見る。最後に第三章では、そうした指導者が占領当局によって次々と強制的に排除されていくなかで、「指導者を見せない」新しいタイプの組織活動が発展していく様子を示し、占領下で短期間の蜂起が頻発していくまでを分析する。



以上の検討によって、インティファダが発生する頃までに、占領下では蜂起という直接行動の経験が積み、さらに個人を特定されないように組織の名前が政治活動のなかで用いられる状態が生まれていたことを明らかにする。

第二部では、PLO の外交戦略に分析の範囲を広げ、時代は 1980 年代を中心に議論を展開していく。第一部で見た西岸・ガザ地区での PLO 支持の政治活動の拡大は、PLO による両地域への注目と並行していた。この両者の関係がインティファダを分析するうえでも重要になる。なぜなら、占領下のスムードがインティファダへと変容するためには、PLO の関与が不可欠であったからである。先ほど挙げた二つの課題との関係で言えば、この部では第二の関心である PLO による外交戦略と西岸・ガザ地区との関係を軸として、第一部での議論と組み合わせることで、インティファダの発生と展開を分析していく。

第四章では、PLO による政治外交の展開をたどり、ヨルダンとの関係改善のなかで西岸・ガザ地区に対する具体的取り組みが行われていた点を明らかにする。そして第五章では、インティファダの発生の中で、蜂起を維持しようとする西岸・ガザ地区の指導部と、一方で蜂起を政治外交での取り組みに利用していく PLO 指導部の動きについて、独立宣言（1988 年）を事例に検討していく。最後の第六章では、インティファダの展開するなかで行われたイスラエルと PLO との和平交渉の取り組みについて検討し、西岸・ガザ地区の人々が交渉の成果への評価を異にすることで、蜂起が終焉していくまでを分析する。

以上の検討によって、西岸・ガザ地区における政治活動の終着点としてのインティファダと、このインティファダのなかで行われた PLO の政治外交の転換を明らかにし、インティファダがパレスチナ問題において持った意義を提示していきたい。

## 第一部 占領下の人々

## 問題の所在

インティファダを展開した占領地のパレスチナ人たちは、占領開始からインティファダ発生までの 20 年間でどのように過ごしたのだろうか。パレスチナ問題を通史的に概説する場合、占領下の 20 年間に言及されることは稀である[例えば、奈良本 1991; 臼杵 1999; サンバー 2002; 広河 2002; 阿部 2004; 高橋 2010; Cohn-Sherbok and El-Alami 2001; Harms 2005]。これは、同時代的に PLO が展開していた武装闘争に多くの紙幅が割かれるためであり、その PLO が 1982 年のレバノン侵攻で壊滅的な打撃を被った後に、インティファダの発生を契機として占領地のパレスチナ人が取り上げられる場合が多い。しかし、この 20 年間の間、占領地のパレスチナ市民は決して沈黙していたわけではない。むしろ多くの政治活動を展開することで、最終的にインティファダに繋がるさまざまな要素を獲得していったとすら言える。

この第一部では、占領下で展開されたパレスチナ市民による非武装の政治活動の歴史を明らかにしていく。その際に、特にインティファダで力を発揮した「PLO への支持」と「西岸・ガザ地区における独立国家建設の要求」という二つの行動原則の形成と、「指導者を見せない」政治活動の形態が確立される過程に注目したい。一般的な常識から述べれば、それまでに名前が知られていない組織から抗議活動を呼びかけられて、応じる者は少ないであろう。さらにその組織に関わる人物が明らかでない場合は、なおさらである。しかし、インティファダでは、統一指導部が住民から支持を獲得するまでに、それほど時間を要しなかった。具体的に述べれば、わずか 1 ヶ月ほどで、人々は統一指導部の呼びかける日付にストライキを決行するようになっている[Suzuki 2014]。では、なぜ占領下の市民は、こうした未知の組織による呼びかけに応じたのであろうか。それを解き明かすためには、統一指導部がリーフレットのなかでたびたび言及した「PLO への支持」と「西岸・ガザ地区における独立国家建設の要求」という、二つの行動原則が分析の糸口となる。さらに、占領下の住民にとって、インティファダのみが唯一の蜂起ではなかった点も併せて指摘したい。1970 年代から、西岸・ガザ地区の市民は短期間ながらいくつかの蜂起を経験していた。見方を変えれば、1987 年の蜂起のみ、「インティファダ」として知られるほどに長期化したとすら言える。いくつかの蜂起を含めて過去の政治活動の展開を見ることで、インティファダを実現した占領地内部の要因が明らかになっていく。

論文題目 蜂起〈インティファダ〉と占領下のパレスチナ（1967～1993 年）

氏 名 鈴木 啓 之

博士論文公表方法に関する特例申請（やむを得ない事由\*）に基づき、19～105 ページを省略する。なお、内容は 5 年以内に出版予定である。

\*「やむを得ない事由」

8. 博士論文の全部または一部が、単行本もしくは雑誌掲載等の形で刊行される予定である。

## 第二部 PLO と西岸・ガザ地区

## 問題の所在

なぜ、1987年に起きたインティファダのみが、他の蜂起と比較して長期に亘って展開し、オスロ合意を実現するに至ったのだろうか。本稿のこれまでの分析では、この点がいまだ明らかではない。この問いに答えるためには、第一部で見た地域内部の動態に加えて、PLOの外交戦略との関係から分析を行う必要がある。すなわち、PLOの関与があったことで初めて、占領下の蜂起は国際的な政治舞台で影響力を発揮し得たのだ、との立場を本稿はとる。

この第二部では、PLOが西岸・ガザ地区に対してどのような歴史的経緯から関わり、インティファダの展開のなかでこの蜂起の影響力を最大限に利用するためどう取り組んだのかを明らかにしていく。この作業は、インティファダをパレスチナ人が展開した政治活動全体のなかに位置づけ、さらにはそれ以前の蜂起とインティファダが大きく異なった背景を明らかにする取り組みである。すでに第一部での検討で明らかにしたが、占領地内部の動態を見れば、1980年代の中頃までには、インティファダを展開するための要素はほとんど整っていた。「PLOへの支持」と「西岸・ガザ地区における独立国家建設の要求」という二つの行動原則の確立、「指導者を見せない」タイプの政治活動の発展は、1980年代の半ばまでに確認できる。より適切な表現を用いるなら、1980年代には、すでにインティファダと類似した短期間の蜂起が頻発していた。それにも拘わらずインティファダの発生が1987年のタイミングであったのは、占領地の外部との関わり、具体的に述べればPLOの外交戦略が変容する必要があったとするのが、本稿の作業仮説である。インティファダを政治外交において利用し、イスラエル政府と政治交渉を行う意図を公言することで、PLOは蜂起の影響力を最大限に生かすことができた。さらに、占領地ではそうしたPLOの政治外交に理解を示し、蜂起を継続することでPLOの取り組みを後押しする状態が確立されていく。すなわち、統一指導部の役割とは、インティファダを維持することで、PLOの政治外交を支えることであつたとすら言えよう。この見解に至ったとき、インティファダの成果とも捉えられてきたオスロ合意への評価は、見直しを迫られることになる。インティファダの運動としての帰結までを含めて分析するため、再び歴史を遡り、PLOの設立から政治外交の展開の過程を明らかにするところから議論を始めていきたい。

論文題目 蜂起〈インティファダ〉と占領下のパレスチナ（1967～1993 年）

氏 名 鈴木 啓 之

博士論文公表方法に関する特例申請（やむを得ない事由\*）に基づき、108～209 ページを省略する。なお、内容は 5 年以内に出版予定である。

\*「やむを得ない事由」

8. 博士論文の全部または一部が、単行本もしくは雑誌掲載等の形で刊行される予定である。

## 終章

僕は自分の祖国にあつてちっぽけにならず

肩をすぼめることなく

圧制者の面前に立つ

孤児として、丸腰で、素足で

—タウフィーク・ザイヤー

### インティファダ後のパレスチナ

占領下のパレスチナ市民が目指した独立国家の建設は、インティファダから 30 年近くを経た現在も未だその途上にある。オスロ合意を受けて、1994 年 5 月にはカイロ協定<sup>327</sup>が結ばれ、西岸地区の一部（エリコ周辺）とガザ地区で実際に暫定自治が開始された。さらに、1995 年 9 月の拡大自治合意<sup>328</sup>によって、暫定自治区は東エルサレムとヘブロンをのぞく西岸地区の都市部（ラーマッラー、ベツレヘム、カルキーリヤ、トゥールカルム、ナーブルス、ジェニーン）とその他 400 を超える町村へと広がっている<sup>329</sup>。ところが、一方の交渉当事者であるラビン政権は、イスラエル人市民によるラビン首相暗殺（1995 年 11 月）という形で崩壊し、これを引き継いだ同じ労働党のペレス政権も半年ほどでリクードのベンヤミン・ネタニヤフ（Benjamin Netanyahu, 1949–）に敗北し退場した。ネタニヤフ政権は、当時課題となっていたヘブロンに関する交渉に難色を示し、また交渉対象であったはずのエルサレム旧市街の中にトンネルを貫通させるなど、和平交渉の進展を意図的に妨げるような行動を繰り返した。オスロでの秘密交渉に参加したプンダクは、このネタニヤフ政権の時代を、端的に「失敗」（failure）と述べている [Pundak 2002: 97]。ネタニヤフ政権の次に政権を担った労働党のイフド・バラク（Ehud Barak, 1942–）、そして任期を僅かに残したクリントンが和平交渉の早期妥結を目指したが、東エルサレムや境界線、入植地などの

<sup>327</sup> カイロ協定（Cairo Agreement）。1994 年 5 月 4 日、エジプトのカイロで調印された。これによって、パレスチナ暫定自治が開始された。

<sup>328</sup> オスロ II（パレスチナ拡大自治合意, Oslo II, Interim Agreement on the West Bank and the Gaza Strip）。1995 年 9 月 28 日、ワシントンで締結。西岸地区を、安全保障上 3 地域（A 地区、B 地区、C 地区）に管轄分けした。

<sup>329</sup> ヘブロンについては、ネタニヤフ政権期にヘブロン議定書（Hebron Protocol, 1997 年 1 月 17 日に締結）が締結され、市内が H1 地区（パレスチナ自治政府管轄）と H2 地区（イスラエル軍管轄）に分割された。



最終的地位を巡る交渉の行き詰まりは、すでに誰の目にも明らかであった。本稿では主に国防相として登場したシャロンが、リクードの党首として 2000 年 9 月に旧市街の聖域（ハラム・シャリーフ）へと武装警官と共に立ち入るという示威行為を行うに及んで、オスロ和平プロセスは停滞、または崩壊した。アル＝アクサー・インティファダのなかでの「自爆攻撃」の多発と、イスラエル軍による暫定自治区への軍事侵攻の時代が訪れる。アラファートが死去するのは、2004 年 11 月のことである。その後、さまざまな和平提案が主にアメリカによって行われているが、それらが合意に至っていない現在、パレスチナではオスロ合意で取り決められた暫定自治が続いている状態にある。

入植地がオスロ合意の後にも建設され続けたことはすでに指摘したが、その他の最終的地位（東エルサレムの帰属、パレスチナ難民の帰還権、国境の画定、治安の管理権限）も、この 30 年間ににより複雑化した。シャロンが首相となって進めた「分離壁」（Separation Wall）の建設は、イスラエルとパレスチナの力関係を表すように多くの土地をイスラエル側に取り込んでいる。特に東エルサレムを大きく取り囲んで壁が建設されたことで、東エルサレムと他の西岸地区の都市の往来は著しく妨げられている。また、2006 年の議会選挙のあとに生じた権力抗争から、選挙で勝利したはずのハマースの政権が崩壊し、ガザ地区での実効支配に追いやられる事態も起きた。2007 年頃から、ガザ地区への立ち入りは一部の NGO 関係者や国連職員を除き外国人に対して制限されている（本稿で登場した人物の多くが西岸地区に偏るのは、この同時代的なパレスチナ問題の抱える現状を反映している）。2008 年、2012 年、2014 年と連続して行われたガザ地区に対するイスラエル軍の軍事行動では、エジプトに通じる検問所が封鎖され、隣国に見捨てられた状態のなかで戦火に耐える人々の姿があった。一方で、「アラブの春」後の混乱のなかで内戦状態に陥ったシリアでは、依然としてその地位が定まらないパレスチナ難民が無国籍であるがゆえに隣国のヨルダンに避難できない事態が発生している。現在においてもなお、日常生活を脅かされている人々は各地に存在する。彼らが日常のなかで織りなす新たなスムードが、まったく新しい蜂起（インティファダ）を準備している可能性を、決して否定はできないのである。

## 分析の結論

本稿では、「占領下に 20 年置かれたパレスチナ市民は、なぜインティファダを 1987 年という年に開始することができたのだろうか」という問いを序章に掲げ、この終章に至るまで六つの章を立てて分析を行ってきた。特に、蜂起への市民の参加と政治交渉の実現を

インティファダの特徴として指摘し、この二つの事象の背景を明らかにする目的から、二部構成で議論を展開した。

第一部の分析のなかで明らかになったことは、スムードとインティファダの間には、ある一定の関係性が見いだせるということである。すなわち、それ以前の 20 年間におけるさまざまな要素の蓄積が、インティファダの発生には不可欠であった。特に顕著なものとして、本稿では、組織活動の展開（第一章）、「PLO への支持」と「パレスチナ独立国家建設の要求」という二つの行動原則の確立（第二章）、そして「指導者を見せない」タイプの政治活動の発展（第三章）を指摘した。もちろん、スムードの 20 年間に起きたすべての出来事をインティファダと関連づけることは不可能であり、またそうした分析には問題も多くなるだろう。実際に PNF の活動は、PLO との直接の繋がりを持っていたが、そうであるが故にイスラエルの政治弾圧によって間もなく崩壊した。本稿で「ある一定の関係性」と述べたのは、すべてではないが、確かに一部の要素が後のインティファダで生かされた点を強調するためである。NGC が占領下で密かに設立された 1978 年頃を分水嶺として行動原則の確立が、1982 年頃からの鉄拳政策のなかで「指導者を見せない」タイプの政治活動の発展があったことは、インティファダに繋がる要素として特に重要であった。ただしこれでは、インティファダとそれ以前の時代の政治活動との関連を指摘したヒルターマンの研究結果と同じ結論を導いたことになる。本稿が特に先行研究と異なるのは、こうした占領下の政治活動の発展を重要視しながら、インティファダの発生にはもう一つの重要な要素が存在したことを指摘する点にある。すなわち、インティファダには、PLO による政治外交の付随が不可欠であったという事実を本稿では強調した。蜂起という運動の形は、すでに 1980 年代の中頃には毎年のように確認された。それにも拘わらずこうした蜂起が短期間のうちに終了し、インティファダのように長期化しなかった背景には、PLO による政治交渉の展開が付随していなかったからに他ならない。

第二部では、PLO のなかで政治交渉に前向きなグループが 1970 年代中頃から活動していたことを指摘し、PLO の外交路線が伴ったことからインティファダが長期化したと主張した。歴史的な事実として、武装組織であるファタハや PFLP、DFLP などが主導権を握ることで、PLO はアラブ諸国から独立した独自の外交戦略を展開することができた。国連を舞台にした政治外交の展開や、アメリカが公にした和平提案への対応など、公式の目標とした「パレスチナ全土解放」から外れるものであっても、現実主義的な判断を優先する側面が当時の PLO には認められる。この点から、本稿では政治組織としての PLO という観点

を強調した。この PLO がヨルダンとの同盟関係を解消し、党派内での結束を固めたタイミングで発生したのが、インティファダである。したがって、1987 年発生のインティファダは、それ以前の蜂起とは異なる環境のもとで展開されることになった。蜂起の展開と PLO による政治外交が並行し、蜂起の影響力は後者によって最大限に高められた。もちろん、インティファダの発生によって PLO の政治外交が（再び）活発化したという分析も依然として可能であろう。一方で、本稿で特に着目したのは、PLO の政治外交の展開がインティファダの長期化をもたらしたという点である。この観点でインティファダの終焉を捉えるならば、PLO によってオスロ合意が結ばれたことで、蜂起が終えられたことにも納得できる。オスロ合意の署名によって、蜂起の継続に不可欠であったさまざまな組織やグループ、個人のあいだで行われてきた調整や妥協、協力が解消され、インティファダは終了した。

以上の分析から、本稿の問いに答えを示すならば、次のようになるだろう。すなわち、インティファダの発生は、スムードの 20 年間と PLO の政治外交の積み重ねを必要とした。この二つの背景が揃ったのが、1987 年というタイミングである。蜂起の開始という点のみに焦点を絞れば、占領下のパレスチナ市民は、1974 年の時点で初めて蜂起を経験し、その後の 1980 年代の中頃からは毎年のように蜂起を行っていた。1980 年代半ば頃までに、組織活動の展開、「PLO への支持」と「パレスチナ独立国家建設の要求」という二つの行動原則の確立、そして「指導者を見せない」タイプの政治活動の発展といったインティファダの展開のために必要な要素は揃っていたと言えるだろう。しかし、蜂起が「インティファダ」という名前で世界的に知られるほど長期化するためには、PLO の政治外交が同時に展開する必要があった。PLO 主流派がヨルダンとの同盟関係を破棄し、党派和解に踏み切った 1987 年というタイミングは、PLO がインティファダを政治外交のなかで利用し、結果として蜂起の影響力を高めるという結果に大きく作用した。この点で本稿は、蜂起が発生する要素は占領地で生まれながら、そうした蜂起のうちの一つが「インティファダ」として国際的に知られるほどに長期化した要因は、同時期に PLO の政治外交が展開されたことにあると考える。つまり、蜂起を維持する西岸・ガザ地区の市民と、イスラエルやアメリカを相手とした政治外交を展開する PLO の双方が存在することで、インティファダは拡大し、長期化した。この点でインティファダとは、単なる大衆蜂起ではなく、ある民族集団がほとんど一丸となって取り組んだ、政治的な取り組みであったとは言えないだろうか。つまり、インティファダこそは、パレスチナ問題の歴史のなかで、パレスチナ

人が主体となって起こした最も大きな政治運動だったのである。

こうした本稿の結論から中東近現代史を改めて眺めるならば、「アラブの春」を含めて、大きな大衆運動や蜂起が立ち現れる時、その背景をより時代を遡って分析する必要性が示される。より具体的に述べれば、その運動や事件が起こった「地域」が形成された時代から分析を行うことによって、大きな政治変動の背景や要因、さらには（場合によっては）その後の展開を説明することが可能になるだろう。もちろん、あらゆる政治的事象には、本稿で見てきたような長期的な要因や背景に加えて、短期的な要因（インティファダの場合で言えば、ガザ地区での交通事故）が存在する。それでも長期的な要因や背景に着目する意義とは、ある大きな出来事を歴史的な文脈のなかに位置づけ、その出来事を通して地域全体の姿を再構築して示す点にある。地域研究が他のディシプリンの事例研究と異なる貢献をなし得るとしたら、こうした文脈化、地域の新しい姿の提示に取り組むことを除いて他にはないだろう。インティファダを通して本稿が見てきたものとは、パレスチナという地域の一つの姿なのである。

### 分析の限界と今後の課題

もちろん、本稿の分析によって、インティファダをめぐる疑問のすべてが解かれたわけではない。先行研究と比較して本稿が持つ特徴をあらためて整理すれば、インティファダを事例に、占領下のパレスチナ市民が展開した政治活動と、PLO の政治外交に関連づけて論じた点が新しい。特に、ナブルスに保管されるインティファダのリーフレットを一次資料に加えることで、インティファダの展開を指導部の動きに着目して分析した点を特徴として示すことができるだろう。しかしながら、先ほどの例で述べれば、本稿はインティファダという出来事を通して、パレスチナ（問題）の一つの姿を提示したに過ぎない。例えば、本稿の分析が、筆者の調査地である西岸地区に集中していることへの批判は免れないだろう。また、西岸地区のなかでも都市部に分析の焦点を当てたことで、農村部や難民キャンプでの具体的な政治活動については、ほとんど分析のなかで扱うことができなかった。ヘブライ語を含めたイスラエル側の資料が不足していることも克服すべき課題である。各地域、各時代におけるパレスチナ人の政治活動を明らかにする取り組みは、今後の課題としてここに明記しておきたい。

## 巻末資料

### 資料 1 パレスチナ民族戦線（PNF）政治綱領・1973 年 8 月 15 日

占領地の人民諸君よ

昨今において、占領地内外のパレスチナ人民すべては、パレスチナ人民の民族的運動に打撃を与え、その〔運動としての〕性格を否定し、その正当なる大義を抹消しようとする植民地主義シオニズムの陰謀と攻撃の高まりに直面している。

〔中略〕

占領地の人民は、こうした危機に立ち向かうために互いに呼びかける。多くの意見を経て、戦う人民の力を動員し、統一する手法として、パレスチナ民族戦線〔PNF〕の結成を〔人民は〕決定した。これは、本年の初めにカイロで開催された PNC の呼びかけに応えたものである。

次に述べる通り、パレスチナ民族戦線は PLO に代表されるパレスチナの民族運動の切り離すことができぬ一部であり、この解放運動はアラブの解放運動の一部である。

占領地のパレスチナ民族戦線は、以下の行動プログラムを採用する。

1. シオニストによる占領への抵抗と占領されたアラブの土地を解放するための闘争。
2. パレスチナ・アラブの人民の合法的権利、ことに土地への自決権と住居への帰還権の保障。
3. たとえパレスチナ政体 (al-kiyān al-filasṭīnī) や民政 (al-idāra al-madanīya)、自治 (al-ḥukm al-dhātī)、アロン計画などのシオニストの計画であろうと、フサイン国王の計画であろうと、アメリカの解決案であろうと、パレスチナ・アラブ人民の大義を抹消し、その権利を放棄させることを目指す共謀すべてを拒絶。
4. 没収、閉鎖、ユダヤ化に直面するアラブの土地や資産の防衛。
5. 我々アラブの経済の保護。そして破壊によってシオニストの企業に組み込もうとする占領当局の策略にさらされるアラブの農業、製造業、商業プロジェクトや組織の維持。
6. シオニストによる操作と解体から我々のアラブの文化や歴史を、特に教育カリキュラムの分野で守ること。
7. 破壊と没収といったシオニストの行動に対して、聖地を保護すること。
8. 人民と土地や、土地を守る英雄的な闘争の結びつきを体現した大衆文化や抵抗文学を高く評価すること。
9. シオニストの牢獄で苦しむ我々が同胞に最大限に配慮すること。彼らの苦しみを和らげ、その解放を目指す闘争。彼らの家族、子供や妻、親戚への支援。

- 1 0. 労働組合や学生連合、女性連合、有志団体、宗教組織、社会組織への支持、これらが代表するグループの権利を守る活動の援助、占領に対する闘争に力を動員すること、これら諸組織すべてとともにシオニストによる侵入の企てからこれらを守るために行動すること、分裂と解体、非愛国的なうねりのなかに若者たちをおぼれさせようとする占領者による企てに抵抗すること。
- 1 1. 本戦線はパレスチナとヨルダンの兄弟的人民の統一を確認し、ヨルダンが植民地主義的シオニストの攻撃に対するアラブとパレスチナの闘争が拠点を置く強固な基地に変化すべきだと宣言する。
- 1 2. 本線線は、占領地内部と外部のパレスチナ人民の民族運動がアラブの解放運動の強固な一部分であることを確認する。継続するシオニストによる占領と攻撃は、パレスチナ人民の権利と利益を脅かすのみならず、同胞である他のアラブ人民の権利や存在そのものすら脅かしている。
- 1 3. 本線線は、社会主義国家によって率いられる世界のすべての進歩的勢力や革命勢力との友好的繋がりや協調の強化のために闘い、国際分野における我々の正当な大義への友好と支持を増すために行動する。

〔後略〕

(出所) PAD1973-no. 239

資料2 1972年地方議会選挙における市長一覧

市	市長当選者	得票
3月28日実施		
アッラーハ (‘Arrāba)	アフイーフ・ムハンマド・ハサン・アフドゥッラヒーム (‘Afīf Muḥammad Ḥasan ‘Abd al-Raḥīm)	294
アナブター (‘Anabtā)	ラフイク・アフマト・ハムドゥッラー (Rafīq Aḥmad Ḥamd Allāh) 後にワリド・ハムドゥッラー (Walīd Ḥamd Allāh) が就任	372
エリコ (Arīḥā)	シャフイク・タウフイク・ハネーリー (Shafīq Tawfīq Bālī)	613
カルキリーヤ (Qalqīliya)	ムスタファー・フサイン・ムハンマド・ムスタファー・ナッザール (Muṣṭafā Ḥusayn Muḥammad Muṣṭafā Nazzāl)	887
サルフィート (Salfīt)	ハサン・フサイン・ズィール (Ḥasan Ḥusayn al-Zīr)	信任
ジェニン (Janīn)	アフマト・カマル・イブラヒーム・サアデッィン (Aḥmad Kamāl Ibrāhīm al-Sa‘dī)	858
トゥーバース (Ṭūbās)	ハシム・スライマーン・サリフ・ダラークマ (Ḥāshim Sulaymān Ṣālīḥ Darāghma)	665
トゥルカーム (Ṭulukarm)	ヒルミー・ユースフ・ハヌーン (Ḥilmī Yūsuf Ḥanūn)	1651
ナーブルス (Nābulus)	ハーッジ・マアズ・ズィ・ミスリー (al-Ḥājj Ma‘zūz al-Miṣrī)	3168
ヤバド (Ya‘bad)	ムルーフ・アニス・カスィム・ハマルシャ (Murūḥ Anīs al-Qāsim Ḥamārusha)	417
5月2日実施		
スイルワド (Silwād)	ハーッジ・ムサー・ムハンマド・ハムダーン (al-Ḥājj Mūsā Muḥammad Ḥamdān)	96
ディール・ディブワン (Dayr Dibwān)	ユースフ・ムハンマド・ガッナーム (Yūsuf Muḥammad Ghannām)	220
ドゥラー (Dūrā)	ムハンマド・ムサー・アムル (Muḥammad Mūsā ‘Amr)	248
バニー・ザイト (Banī Zayd)	ファイク・アリー・リーマウイー (Fā‘iq ‘Alī al-Rīmāwī)	152
ハルフル (Ḥalḥūl)	ヒジャーズィー・ムハンマド・ハリール・マディヤ (Ḥijāzī Muḥammad Khalīl Maḍīya)	190
ビールゼイト (Bīrzayt)	ズィヤダ・ヤクブ・ズィヤダ (Ziyāda Ya‘qūb Ziyāda)	248
アルビラ (al-Bīra)	アフドゥッウルシヤワド・サリフ (‘Abd al-Jawād Ṣālīḥ)	1318
バイトウニヤ (Baytūniyā)	ファフリー・イーサー・イスマール (Fakhri ‘Isā Ismā‘īl)	256
バイト・サーフル (Bayt Sāḥūr)	アワド・ハーッジ・シヤフル・アウドゥッラー・ヒンデッィン (‘Awaḍ al-Ḥājj Jabr ‘Awd Allāh Hindī)	803
バイト・シヤラー (Bayt Jālā)	ファラフ・サーハーン・アラジ (Farah Ṣābā al-A‘raj)	453
バツレハム (Bayt Laḥm)	イルヤース・フライジ (Ilyās Furayj)	998
ハッロン (al-Khalīl)	ムハンマド・アリー・ジャハリー (Muḥammad ‘Alī al-Ja‘barī)	信任
ラーマッラー (Rām Allāh)	カリム・ハラフ (Karīm Khalaf)	843

(出所) *al-Quds*, 30 Mar. 1972., 4 May. 1972.などを参考に筆者作成

(注) スイルワド、ディール・ディブワン、バニー・ザイト、バイト・サーフルに関しては他資料での追加確認ができなかった

資料3 1976年地方議会選挙における市長一覧

市	市長当選者（＊再選）	得票
アナブター （‘Anabtā）	ワヒド・ハムド・ウッラー（Waḥīd al-Ḥamd Allāh）	806
アッラーハ （‘Arrāba）	マフムド・アブ・ト・ウルファッターフ・アブ・ト・ウルカニ・アーリタ（Maḥmūd ‘Abd al-Fattāḥ ‘Abd al-Ghanī al-‘Ārīḍa）	447
エリコ （Arīḥā）	シャフイー・タウフイー・ハリー（Shafīq Tawfīq Bālī）＊ アブ・ト・ウルアズ・イズ・スワイティー（‘Abd al-‘Azīz al-Suwayṭī）が前任者死後に後任	830
カバートイーヤ （Qabāṭīya）	ムハンマド・ハリール・サハ・イナ（Muḥammad Khalīl Sabā‘īna）	610
カルキリーヤ （Qalqīliya）	アミン・イブラーヒム・ナスル（Amin Ibrāhīm al-Naṣr）	1950
サルフィート （Salfīt）	ハサン・フサイン・アブ・ト・ウルカーデ・イル・ス・イル（Ḥasan Ḥusayn ‘Abd al-Qādir al-Zīr）＊	802
ジ・エニン （Janīn）	アフマド・カマル・イブラーヒム・サアデ・イー（Aḥmad Kamāl Ibrāhīm al-Sa‘dī）＊	1746
スイルワート （Silwād）	-	-
トゥーハース （Tūbās）	ハシム・スライマーン・サリフ・タ・ラーク・マ（Ḥāshim Sulaymān Ṣāliḥ Darāghma）＊	865
トゥーラー （Dūrā）	ムハンマド・ムサー・アムル（Muḥammad Mūsā ‘Amr）＊	654
トゥールカルム （Tūlukarm）	ヒルミ・ハヌーン（Ḥilmī Hanūn）＊	3163
ナーブルス （Nābulus）	ハッサム・アフマド・シャカア（Bassām Aḥmad al-Shak‘a）	6617
バン・ザイト （Banī Zayd）	-	-
ハルフル （Halḥūl）	ムハンマド・ハサン・アブ・ト・ウルラフマーン・ミルヒム（Muḥammad Ḥasan ‘Abd al-Raḥmān Milḥim）	639
ビールゼイト （Bīrzayt）	ズィヤーダ・ヤアクーブ・ズィヤーダ（Ziyāda Ya‘qūb Ziyāda）＊	428
アルビール （al-Bīra）	イブラーヒム・タウイー（Ibrāhīm al-Tawīl）	1351
バイトウニヤ （Baytūniyā）	アフマド・ルトウフィー（Aḥmad Luṭfī）	411
バイト・サーフル （Bayt Sāḥūr）	ハンナー・フリー・アトラシュ（Ḥannā Khūrī al-Atrash）	1443
バイト・シヤラー （Bayt Jālā）	ビシヤラ・サリハ・スライマーン・タ・ウート（Bishāra Ṣalībā Sulaymān Dāwūd）	1196
バツレハム （Bayt Laḥm）	イルヤス・フライジ（Ilyās Furayj）＊	1969
ファロン （al-Khalīl）	ファフト・タ・ウート・ムハンマド・アブ・ト・ウッラー・カワースイミー（Fahd Dāwud Muḥammad ‘Abd Allāh al-Qawāsīmī）	5116
ヤハド （Ya‘bad）	ムルフ・アニス・カスィム・ハマルシャ（Murūḥ Anīs al-Qāsim Ḥamārusha）＊	692
ヤッター （Yattā）	アフマド・ムサー・アブ・クハ・イタ（Aḥmad Mūsā Abū Qubayṭa）	829
ラーマッラー （Rām Allāh）	カリム・ハラフ（Karīm Khalaf）＊	2215

（出所） *al-Quds*, 8 Apr. 1976., 14 Apr. 1976., 15 Apr. 1976.などを参考に筆者作成

（注） エリコ、カバートイーヤ、ジ・エニンに関しては他資料での追加確認ができなかった



#### 資料4 キャンプ・デーヴィッド合意抗議集会の声明・1978年9月28日

キャンプ・デーヴィッド合意によって引き起こされた一連の出来事と情勢のなかで、エルサレムと周辺地域の住民の多くのグループが集った。すべての組合とイスラームおよびキリスト教の宗教組織、女性組織、商工会議所、福祉団体、クラブ、エルサレムと地域の選ばれた人々が、エルサレムのアラブ大卒者クラブの建物に集い、以下の声明を発行することを決定した。

1. キャンプ・デーヴィッド合意に関して、その文章すべて、付属文書すべて、これに署名した者の口から発せられる説明すべてを徹底的に拒絶することを宣言する。
2. キャンプ・デーヴィッド合意は闘争的な民族主義と相容れないものである。その実態はエジプトとイスラエルの単独和解を意味する合意であり、その第一の目的はエジプトをアラブの戦線から外し、パレスチナの大義を巡る争いを占領されたエジプトの砂だらけの区画（*misāḥa min al-rimāl*）を巡る争いに替えることである。
3. キャンプ・デーヴィッド合意は、アラブ首脳会議のすべての諸決定に全般的な形で明確に反している。ことにアルジェとラバトで開催された第6回首脳会議と第7回首脳会議に反しており、両会議では決議で単独解決を拒否することが明確に述べられ、すべての分野で協働することを諸勢力に求めている。同合意はアラブ連盟憲章と、アラブ共同防衛協定にも反したものである。
4. 同じく、キャンプ・デーヴィッド合意は、パレスチナ問題に関して続いた国際連合機関の諸決定すべてに明らかに反しており、国際的な意志に明らかに制限をかけ、パレスチナ人民の当然の権利を著しく侵害しているに等しい。
5. この合意はアラブの連帯を揺るがし、シオニストの根幹的な基礎を担保した。それはアラブの全ての国家と別々に二国家交渉を行うとの原則であり、つまり紛争に取り組む際の地域主義と地域の利害の優先を課することになる。この論理は、パレスチナ問題を著しく危険にさらすものである。
6. キャンプ・デーヴィッド合意は、パレスチナ・アラブ人民の権利を否定し、PLO がその唯一にして正当な代表であるとの指摘も無視し、帰還と自決、そして自らの土地への自由な独立国家を建設する権利への言及も無視した。
7. キャンプ・デーヴィッド合意は、イスラエルに対してアラブのエルサレムや西岸地区、ガザ地区、その他アラブの土地から撤退することを義務づけなかった。提示された自治は占領を保障し、占領を根付かせ、土地に組み込み、人民をイスラエルが恒常的に管理することを明確に意味している。これは占領地の住民全体が拒否したベギンの計画の焼き直しである。
8. 会議参加者は、パレスチナ人民の闘争はかつて、また現在も統一と自由、進歩のためのアラブ人民の戦いの切り離せぬ一部であると考えている。したがってこの地域の歩みは、敵勢力がいかに分裂を試みようとも共同、統一したものであり、占領地内部のと外部のパレスチナ人民は、切り離しがたい一つのものである。

9. 人民の民族的 (al-qawmīya)、歴史的権利は、いかなる場合も侵害されべからざるものであると確認する。この権利はある世代や国家、指導者の所有物ではなく、パレスチナ問題はアラブの問題であり、アラブの〔パレスチナに対する〕責任は、いかなるアラブの国家でもこれを諦めたり放棄したりできる類いのものではない。
10. 占領下のアラブの土地 (al-arāḍī al-‘arabīya al-muḥtalla) から完全かつ実際にイスラエル軍が撤退し、パレスチナ人民に帰還権と自決権、自らの土地への自由で独立した国家の建設の権利を与えることなしに平和はないと確認する。また、パレスチナ・アラブ人民の唯一にして正当な代表である PLO のもとで、エルサレムと西岸地区、ガザ地区においてパレスチナ・アラブの主権が行使されることなしにこの地域で平和が安定することはないと確認する。
11. 会議参加者は、これらすべての危険を含んだキャンプ・デーヴィッド合意が、アラブ人民に対して、政府、人民、組織のレベルで課せられており、これに対抗してアラブ大衆の意志と民族的願いを真摯に反映した立場をとるべきと考えている。
12. 占領地のすべての住民は、キャンプ・デーヴィッド合意において言及される新たな自治を受け入れさせようと現在行われている企みに対して、統一した〔拒絶の〕立場をとること、これを手助けする行為を非難することを呼びかける。

ヒルミー・ムフタスィブ師 イスラーム〔高等〕機構代表

サアドウッディーン・イルミー師 裁判官、エルサレム・ムフティー

アクラマ・サブリー師 説教と導き部局長 (Mudīr al-Wa‘z wa al-Irshād)

ルトゥフィー・ラハーム博士 ローマ・カトリック総主教副代表

アンワル・ヌサイバ弁護士

サイード・アラーウッディーン弁護士

タイスィール・カヌアーン裁判官

ハサン・アブー・ミーザル裁判官

ズライハ・シャハービー女史 アラブ女性連合会長

アミン・ハティーブ博士 福祉団体連合会長

サミール・カーティバ医師 医師協会代表

ジュリース・フリー弁護士 弁護士組合代表

イブラーヒーム・ダッカーク技師 技師組合代表

ナスィーブ・アブドゥッラティーフ博士 歯科医師組合代表

イスマーイル・タズィーズ氏 薬剤師組合代表

ファーク・バラカート氏 エルサレム市議会議員

ムハンマド・アブー・アムル氏 商工会議所委員

アブドゥッラウフ・アブー・アサブ氏 飲食業組合

ファーズ・アブドゥンヌール氏 商工会議所委員

ナビール・アッザ氏 電気会社職員組合代表  
サラーフ・ズハイカ氏 公務員組合代表  
ハサン・キーク技師 技師組合  
アミーン・ハティーブ博士 アラブ大卒者クラブ会長  
アブドゥッラー・ビブリー博士 アラブ大卒者クラブ・運営局委員  
ヴィクトル・バタールサ博士 アラブ大卒者クラブ・運営局委員  
アズミー・シュアイビー博士 アラブ大卒者クラブ・運営局委員  
アブドゥルムフスィン・ハマーム博士 アラブ大卒者クラブ・運営局委員  
ハーシム・ハリール・イーサー博士 アラブ大卒者クラブ・運営局委員

(出所) PAD1978-no. 348

## 資料5 キャンプ・デーヴィッド合意への反対会議の声明・1978年10月1日

1. この合意に関し、その文書ならびに解説、付属文書のすべてを大枠から詳細にいたるまで拒絶する。
2. キャンプ・デーヴィッド合意は闘争的な民族主義と相反する性格のものである。同合意は実際にエジプトとイスラエルの間の単独和解をもたらすものであり、これは本質的にエジプトをアラブの陣営 (al-sāḥa al-‘arabiya) から離脱させ、アラブとアフリカの解放運動に打撃を与えることを目的としたものである。
3. この合意は、アラブ諸国首脳会議の諸決定、ことにアルジェとラバトの首脳会議の決定に明らかに違反している。両会議では、明確に単独〔交渉による〕解決を拒絶することが決定され、すべての分野で協働することを諸勢力に求めている。
4. この合意は、パレスチナ問題に関する国連総会の諸決議と相反するものであり、国際〔社会の〕意志に著しく挑戦し、パレスチナ人民の当然の権利を侵害するものである。
5. この合意は、パレスチナ人民の諸権利と相反するものであり、中東で闘われ続けている正当なる問題をないがしろにするものである。パレスチナ人民の剝奪された権利や土地に対する権利を無視し、パレスチナ・アラブ人民の唯一にして正当な指導者である PLO という正当なる指導部をも無視し、反対にかつて幾度も人民がそのすべてにおいて拒絶した自治〔状態〕をつくり出すことによって、占領下に〔PLO の〕替え玉の指導部をつくり出そうとしている。
6. パレスチナ人民の闘争は、かつても現在もアラブ人民の自由と統一と発展のための闘争の一部、そして世界の解放運動の切り離せぬ一部であり、占領地内部および外部のパレスチナ人民は切り離せぬ一体のものである。
7. この地域の平和は、占領下のアラブの土地からイスラエル軍が完全に、かつ実際に撤退し、パレスチナ人民に帰還権と自決権、そしてこの大地にエルサレムを首都として独立した自由な国家を建設する権利を与えることなしには実現されない。
8. 自治の計画は、形としても概念としても否定された。我々はこの計画を占領に貢献するものとみなしており、人民の抑圧を続け、計画で謳われた諸権利を取り上げ、人民の大志や故郷への権利、自決権そのものまでもくつがえすための公の協議であると考える。
9. パレスチナの脈打つ心臓である愛すべきエルサレムというこの地から、我々は全国のアラブ大衆に宛てて、内部と外部における民族的統一性を堅持し、正当なる代表 PLO のもとに集うことを確認し、提示された自治〔計画〕やその他の降伏的な解決案を通過させようとする破滅的な試みすべてに対して一人の人物であるかのように〔対峙せよ〕と〔メッセージを〕送る。

この場において、我々は域内と域外のパレスチナ人民、英雄的な死者たち、「イスラエル」

の牢獄にある囚人たちに敬意を表する。また、忍耐・抗戦戦線 (Jabha al-Şumūd wa al-Taşaddī) と、同戦線によるトリポリとダマスカスでの 2 つの首脳会議の諸決定に敬意を表する。それら諸決定は、アラブ民族がその闘争を通じて刻んできたアラブの闘争的立場の延長とみなすことができる。そして、我々は、我々の権利を支持する明確な立場をとるすべての同盟国、友好国に敬意を表する。

イスラーム〔高等〕機構代表ヒルミー・ムフタスィブ師、ルトゥフィー・ラハーム博士、バッサム・シャカア、アミール・ナスル、ムスタファー・アブドゥンナビー博士、ヒルミー・ハヌーン、ジョルジ・ハズブーン、アズミー・シュアイビー博士、ムーサー・マフムード・ムーサー、アブドゥッラー・アブドゥルハミード・スライマーン、ヒシャーム・アーディル・アブド、ムハンマド・サフワーン、ヤースィル・アスラーン、アター・バドル、ムハンマド・アウラターニー、ジュリース・フリー弁護士、ハサン・ダフラ、イブラーヒーム・アウドゥッラー、イスマーイール・タズィーズ、ムハンマド・シャーキル・ウサイリー、イブラーヒーム・ハサン、ハサン・ムーサー・ムスタファー、ムハンマド・アッバース・アブドゥルハック、ユースフ・ハリーフア、ファリード・タワーシャ、ヤアクーブ・ファラーフ、アブドゥルムヌイム・マンスール、ワジュディー・ナトシャ博士、ラスミー・マタリーヤ、フワード・リズク、イスマーイール・アジュワ、カリーム・ハラフ、ムハンマド・ムーサー・アムル、ジャミール・ウスマーン・ナースィル、ブルハーン・ヤイーシュ、アブド・イスマーイール、アブドゥッラー・ムハンマド・アブドゥルジャービル、ムバーラク・アブドゥルハーディー、ニムル・ハマド、ムハンマド・アブドゥルカリーム・アブー・リヤーン、アウダ・タンティース牧師、サミール・カーティバ博士、アフマド・シャウキー・ムーサー、ヌクラー・ファリード・アウダ博士、サイード・アラウッディーン、アミーン・シャハーダ、アフマド・ウスマーン、サラーフ・ズハイキー、アブドゥルアズィーズ・アリー、ムハンマド・ハリール・カッザーズ、アブドゥッラー・ムハンマド・アフマド・ミシュアル、サリーム・スライマーン、ジャースィル・ムスリフ、ハルドゥーン・アブドゥルハック、ジャミール・タリーフィー、ジャマル・シャクーカーニー、イブラーヒーム・アブー・ガルビーヤ、ザヒーラ・スース、ラージフ・サルフィーティー、アミーン・バハジ博士、スライマーン・イブラーヒーム、ムハンマド・ハサン・ミルヒム、ムルーフ・アニース・カーシム、マフムード・アブドゥルファッターフ・アワダ、アミーン・ハティーブ博士、ハンナー・ムーサー・カスィース、ファフド・イスマーイール・ムハンマド、ムスタファー・ユースフ・ハマド、ムハンマド・ユースフ・バグダーディー、ハーティム・アブー・ガザーラ博士、ハリール・アブドゥッラフマーン、フサイン・ファラフ・タウィール、ユースフ・ムッラール、イブラーヒーム・ダッカーク、ヒジャーズィー・ラシード、ナスィーブ・アブドゥッラティーフ博士、マフムード・ムーサー・アムル、アブドゥッラー・アウダ・ラジューブ、イスハーク・ナトシャ、アリー・ハイルッディーン、ムハンマド・アブー・ガルビーヤ、アドナーン・ダーギル、マーリク・

アフイーフ・ハーッジ・イブラーヒーム、アブドゥルムフスィン・ハマーム、ザキー・マ  
ーリキー、イブラーヒーム・アーイシュ、ハサン・ジャラード、ユースフ・ファルハーン、  
アラファート・バルゲーティー、アブドゥッラウフ・アブー・アサブ、ルトゥフィー・  
リハーム

(出所) PAD1978-no. 352

資料6 インティファダのリーフレット関連資料（刊行物と公開資料）

資料名	収録数	収録期間	対象組織	その他
Mishal and Aharoni [1994]	51 本	1987 年 12 月～ 1991 年 5 月	統一指導部 ハマース	ハマースの収録番号に一部誤りあり
パレスチナ蜂起統一民族指導部 [1993]	47 本	1988 年 1 月～ 1989 年 10 月	統一指導部	欠番なし（第 1 号～第 47 号）
Anonymous [1989]	49 本	1988 年 1 月～ 1989 年 12 月	統一指導部	
Munazzama al-Tahrir al-Filasṭīniya [1989]	30 本	1988 年 1 月～ 1988 年 12 月	統一指導部	
al-Qiyāda al-Waṭaniya al-Muwaḥḥada [1990]	30 本	1988 年 1 月～ 1988 年 12 月	統一指導部	欠番なし（第 1 号～第 30 号）
Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmiya [1990]	62 本	1989 年 11 月～ 1990 年 11 月	ハマース	連番付の通常版に加えて、臨時声明も収集
Web サイト：WAFA. “Bayānāt al-Intifāda.”	89 本	1988 年 1 月～ 1994 年 3 月	統一指導部	
Legrain [1991]	149 本	1987 年 12 月～ 1988 年 12 月	統一指導部 ハマース イスラエル当局 （イスラーム聖戦） （PFLP）	攪乱リーフレット 18 本を収録
IISH コレクション	70 本	1988 年 1 月～ 1989 年 7 月	統一指導部 PFLP パレスチナ共産党 （DFLP） （ファタハ） （ハマース）	圧倒的に統一指導部が多い
Web サイト：Birzeit University, Palestine Archive	約 150～ 200 本	1987 年 12 月～ 1994 年 8 月	統一指導部 ハマース イスラーム聖戦	一部に WAFA からの転載があり、重複が多数存在
Šālīḥ [1991]	80 本	1988 年 1 月～ 1991 年 6 月	イスラエル当局	その他 8 本の文書が参考資料として付随
ナーブルス市立図書館	861 本	1987 年 10 月～ 1996 年（2006 年）	統一指導部 ファタハ ハマース DFLP PFLP 共産党 イスラーム聖戦 解放党 アラブ解放戦線 その他	

（出所）収集資料から筆者作成

（注）「対象組織」で括弧付は収録数が極端に少ないことを示す

## 資料7 ハマース第一号声明・1987年12月14日

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において

汝ら、信徒の者、忍耐強くあれ。互いに忍耐を競い合え。己が護りを固うせよ。アッラーを畏れかしこめ。さすれば汝らやがて栄達の道に行くであろう。\*\*1

おお備えある我がムスリムの人々よ：

諸君らは今日、ユダヤ人とその支援者に対するアッラーの宿命の約束のうえにある。いな、諸君ら自身が、完全にして至高なるアッラーのお許しによって遅かれ早かれ彼らの存在の源を根こそぎにするというこの宿命の一部なのである。

ウンマの栄光と名誉のため、故郷での権利を取り戻し、アッラーの旗を地上に掲げるために、この一週間で自らの魂を差し出した何十人もの殉教者と何百人もの負傷者、彼らは我が人民に与えられた犠牲と献身の誠実なる魂のあらわれである。この魂はシオニストの安眠を打ち破りその存在を揺るがし、世界に対して、死を望む人民は死ぬことがないのだと見せつけた。

足かせや牢獄、収容所にも拘わらず、犯罪的な占領のもとで我が人民が味わう苦しみにも拘わらず、日々流される滝のような血にも拘わらず、また負傷にも拘わらず、我が人民が弾圧と高慢に対する忍耐と強固さにおいて勝っていることをユダヤ人は理解すべきである。ついには暴力の政治が我が子らと若者たちによってより激しく応酬されるだろうということを知るべきである。なぜなら、我が子らと若者たちは、我が敵が現世を愛するよりも勝って永遠の樂園を愛するからである。

占領とその圧力すべてを拒否し、大地を切り裂き入植地を植え付ける政治を拒否し、シオニストによる抑圧の政治を拒否して、占領地で備えについた我が人民の蜂起が起きた。やせ細った平和の裏で、そして無駄な国際会合の裏で、キャンプ・デーヴィッド方式での不誠実で不完全な和平の裏で、枯れ果てた良心を叩くために蜂起が起きた。イスラームこそが解決であり、代替案なのだと証明されなければならない。

さあ、無自覚な入植者たちに教えてやろう。我が人民がその道、すなわち殉教と犠牲の道を過去にも今にも知っているということを。我が人民がこの地上における高貴なる者であることを。弾丸や内通者、恥ずべき行為にも拘わらず、軍事政策と入植政策は何ももたらさず、我が人民を霧散させ絶滅させようとするすべての試みは打ち碎かれるであろうことを。

暴力は暴力しか生まず、殺人は殺人にしか至らないことを彼らに知らしめよう。「私は溺れている。なぜ〔いまさら〕濡れることを恐れるだろうか？」という言葉は正鵠を得ている。

犯罪的なシオニストたちへ：

我が人民、町、難民キャンプ、そして村からその手を引け。我々の諸君らとの闘いは、



信条と存在、そして命をかけた闘いである。

我が人民に対してユダヤ人がナチ的な罪を犯していることを世界に知らせよう。彼らは同じ器から飲む者たち〔同じ穴のむじな〕なのである。

暫くすればきっとお前たちにも真相がわかるであろう。 \*\*2

イスラーム抵抗運動

1987 年 12 月 14 日

(出所) Legrain [1991]、 al-Hurūb [1997]、 Hroub [2000] を参照し筆者翻訳

\*\*1 クルアーン「イムラーン一家」章第 200 節。翻訳は井筒俊彦によるものに依拠した。

\*\*2 クルアーン「サード」章第 88 節。翻訳は井筒俊彦によるものに依拠した。

## 資料 8 タイプライターによる打ち直しで誤記が生じた例

統一指導部による第 30 号リーフレット (1988 年 12 月 5 日付) では、誤記が確認される。後者では、リーフレット (bayān, bayānāt) が党派 (tayyār, tayyārāt) に、動詞の「[PFLP は] 信じる」(tu'minu) が「[我々は] 信じる」(nu'minu) へと変化している。また、「民族的な」(al-waṭanīya) と「代表性」(tamthīl) という言葉が、後者では不必要に重複している。

### Legrain [1991] が掲載する文書

• ورغم الفهم الموضوعي لكل بيان من بيانات  
الق.و.م. فإن الجبهة الشعبية التي رفضت (٢٤٢) كموقف سياسي تؤمن إيماناً راسخاً بالوحدة  
الوطنية (وتتمثل لأطرها ومؤسساتها) بما فيها القيادة الوطنية الموحدة.

統一指導部のあらゆるリーフレットへの既述の理解にもかかわらず、政治的立場として 242 号決議を拒否した PFLP は、民族的統一、ならびに統一指導部を含めた PLO の枠組みと諸組織の代表性を「依然として」強固に信じている。

### ナーブルスに保管される文書

• ورغم الفهم الموضوعي لكل بيان من بيانات  
الق.و.م. فإن الجبهة الشعبية التي رفضت القرار (٢٤٢) كموقف سياسي تؤمن إيماناً راسخاً بالوحدة الوطنية وتمثيلاً  
للأطرها ومؤسساتها وقراراتها بما فيها ال (ق.و.م.)

(出所) Legrain [1991: 306] ; NAB, UNL\_31

## 資料9 ファタハ・ハマス合同声明・1991年11月16日

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において

これ汝ら、信徒の者よ、毅然として正義を順守し、アッラーの前に証言せよ。たとえ〔その証言が〕自分自身や両親、或は近親の者に不利であろうとも。\*\*1

全能なるアッラーは真実を話される

パレスチナ解放運動・ファタハ、およびイスラーム抵抗運動・ハマスによる声明

アッラーと民族、歴史に対する自らの責任に鑑み、忍耐強い人民の良心に応え、ファタハとハマス両組織の間に1990年9月21日に署名された文書\*\*2の精神に則り、身体的にも権利の上でも冒瀆と破壊の機会をうかがう民族の敵につけいる隙を与えぬため、我々は両組織の構成員間での最近の軋轢に関して共に検討を行い、差異の溝よりも対話の場が重要であることを深く、また客観的に見出した。したがって、我々は、自らが生きる現実とこの非常に深刻な状況に対する行動のあり方を規定するために、次の指針を宣言する。

- (1) 政治的見解の相違は、権利を奪い去った者からその権利を取り返そうとするすべての闘争的な民族運動に不可避の現象であり、したがって、ある党派が他の党派にその政治的考えや見解の表明を禁じる権利などない。むしろ、我々が現状に直面するなかで多くの見解が存在することは、巨大な危機を目の前にした人民の全体的立場にとって力となる。
- (2) いかなる党派も、解決策となる選択肢に関して自らの立場を表明する自由があるとの取り決め、また、この表明は差異とともに理性的な性格を持つべきであるとの取り決めから、我々はこの原則に反するすべての事柄、特に以下を拒否する。
  - A. 人民や、意見を異にする集団に対する暴力の行使や攻撃。意見は強制されるものではなく提示されるべきものであり、人民はそれに〔支持のために〕集い、または〔拒否のために〕それを払いのける。
  - B. 他の立場に対して、個人への冒瀆や中傷、人を雇っての攻撃や非難など、金銭的手段に訴えること。これには、壁に書き付けること、拡声器や壇上、連帯または抗議デモや集会において発言することも含まれる。
  - C. 民族的な党派の行動が闘争や破壊にさらされること。意見表明の権利は、言説、デモ、集会、ストライキにおいてすべての者に認められており、これらすべては見解を表明するための演壇であって、必ずしも人民に見解を押し付けるものではない。他の〔党派の〕発言を抑圧することも、管理することも〔あらゆる〕党派には認められない。
- (3) 大学や学校、学習教室など、学生や若者が集う場所は、意見表明の場であって、非難し合う場ではない。これらは非常に重要な場であり、教育活動に悪影響を及ぼす軋轢や意見の相違が現れることをすべて避けることがふさわしい。我々は各所にフォローアップ委員会を設立し、意見表明に伴うすべての悪しき現象に終止符を打つこ

とを呼びかける。

- (4) イスラエルの情報機関は、対立と軋轢のすべてに喜び沸き立っている。したがって、我々は人民にたいして、我々を無限の闘争に落とし込む目的を持ったこれらの情報筋から情報を得ないように呼びかける。情報の差異や取るに足らない出来事の氾濫が我々の強固さを覆い隠している。諜報情報に十分に注意せよ。
- (5) 占領を否定する手段と生活のあり方としてインティファダを選んだことは、我々全員の選択である。すべての党派がインティファダを支持し、これに手段と参考となる指針を求める権利がある。誰もが占領を望んでおらず、手段は変化するのである。
- (6) 我々は〔事態の〕フォローアップを認め、起こっているすべての事態と意見の対立を解決するうえでお互いに近しくある。占領を拒絶する塹壕に我々は〔共に〕入っており、我々はすべてのメンバーと幹部に対して、この指針を順守し、対話と真実の判定がなされることを呼びかける。

英雄的なわが人民よ。諸君が皆、占領の抑圧を克服し、自由と独立の光にたどり着く我々の助けとなるために、我々は諸君に対してこの指針を示す。

諸君のうえに平穏とアッラーの慈悲と恵みがあらんことを

パレスチナ解放運動・ファタハ

イスラーム抵抗運動・ハマース\*\*3

1991 年 11 月 16 日

(出所) *NAB, H(N.N.)\_58; F(N.N.)\_127*

\*\*1 クルアーン「女」章第 134 節。翻訳は井筒俊彦によるものに依拠した。

\*\*2 ファタハとハマースの間で合意文章が 1990 年 9 月 21 日に署名されている。

日付が 9 月 19 日と若干異なるが、*Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya* [1990] には、この共同文書が収録されている。

\*\*3 ハマースのもの [*NAB, H(N.N.)\_58*] では、署名でハマースが先となっている。また、地名としてナーブルスと表記される。

資料 10 統一指導部・ハマース合同声明・1992 年 12 月 20 日

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において  
いやいや、我々が真理を掴んで虚偽にはっしと投げつければ、向う  
はたちまち頭を割られて、たちまちにして滅び去る。 \*\*1  
インティファードの声より高き声なし  
追放者たちの呼びかけ

わが人民全体の権利に対する直近の出来事とイスラエルの不正な行為、特にイスラーム抵抗運動（ハマース）に対する現在の攻撃、そして占領地ガザ地区の住民に対する孤立封鎖と数千人の逮捕、闘争的な我がパレスチナ人民の息子たち数百人の追放、イスラエル軍が市民に向けて乱射して 6 人が死亡し、数十人が負傷したハーン・ユーンイスの人民に対するおぞましい虐殺行為。我々はラビンとそのファシスト政権、骨を砕く政策の立案者にして、わが人民の子供たちの殺害者、集団追放政策の統括者に、〔これらの事態の〕全責任があると考え、国際法廷で戦争犯罪として裁かれることを望む。

備えある人民よ

統一指導部〔Q.W.M〕とハマースのあいだで、歩みを統一し、追放された同胞の帰還と占領への力強い抵抗を筆頭としたジハードをあらゆる形で強化する調整がなされた。

これに基づいて、我々はパレスチナの大衆に、そのすべての派閥と党派で次の行動を求める。

1. 統一指導部とハマースが過去に呼びかけたゼネストの中止と、ストの日程の全面闘争の日への転換
2. 国際赤十字の事務所、特に我々の国の首都であるエルサレムにある中央事務所での公開ストの宣言
3. 追放者と逮捕者に連帯する行進とデモを、占領された故郷全土で実施
4. 我々は「攻撃軍」(al-Qūwāt al-Ḍārība)と「前衛部隊」(al-Sawā'id al-Rāmiya)に、抑圧的な占領軍兵士の靴の下の大衆を燃えがらせるための統一行動に向けた調整を呼びかける。
5. 我々は追放された我々の同胞の受け入れを拒否したレバノン政府の立場を歓迎する。占領軍が我が同胞を武器による威嚇のもとにレバノン領へと追い立てることを防ぐために、人間の堤防を打ち立てることを、レバノン大衆とパレスチナ大衆に呼びかける。
6. 追放され、逮捕された同胞に行動的に連帯することを人民に呼びかける。我々は人民のスムードを歓迎し、その忍耐とジハードを祝福しつつ、闘争的な我々が同胞を追放する政策に対して非難と拒絶を示した世界やアラブ、イスラーム、国際〔社会〕の立場を評価する。

「アッラーは偉大なり、アッラーに栄光あれ」

「戦う人民のインティファーダよ永遠なれ」

インティファーダ統一民族指導部

イスラーム抵抗運動 (ハマース)

パレスチナ国家 日曜日

ヒジュラ暦 1423 年ジュマダー・アーハル月 26 日 西暦 1992 年 12 月 20 日

(出所) *NAB*, H(N.N.)\_105; UNL(N.N.)\_71

\*\*1 クルアーン「預言者」章第 18 節。ハマース憲章の第 3 条に同じ個所の引用がある。翻訳は井筒俊彦によるものに依拠した。

## 参照資料・文献

【資料】〈刊行資料〉、〈回顧録・インタビュー書籍〉、〈定期刊行物〉、〈未刊行資料〉、〈インタビュー〉  
【研究文献】〈日本語文献〉、〈英語文献〉、〈アラビア語文献〉、〈ウェブサイト〉、〈統計資料〉、〈写真〉

## 資料

### 〈刊行資料〉

・ PAD

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1965*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1973.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1967*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1973.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1968*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1970.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1969*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1971.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1970*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1972.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1971*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1974.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1972*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1975.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1973*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1976.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1974*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1976.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1975*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1977.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-'Ām 1976*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya,

1978.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-Ām 1977*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1978.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-Ām 1978*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1980.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-Ām 1979*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1981.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-Ām 1980*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1981.

*al-Wathā'iq al-Filasṭīniya al-'Arabīya li-Ām 1981*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya, 1982.

• WA

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1979*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1980.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1981*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1982.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1982*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1983.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1983*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1984.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1984*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1985.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1985*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1986.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1986*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1987.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1987*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya, 1988.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-'Arabīya, 1988*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya,



1989.

*Yawmīyāt wa Wathā'iq al-Waḥda al-‘Arabīya, 1989–1993.* Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya, 1995.

・その他の文書資料集

*al-Wathā'iq Muqāwama al-Ḍiffa al-Gharbīya li-l-Urdunn li-l-Iḥtilāl al-Isrā'īlī 1967.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya, 1968.

Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīnīya, ed. n.d. *Bayānāt al-Majlis al-Markazī li-Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīnīya.* N.p.: n.p. (アブドウルハミード・シューマン財団図書館 [ヨルダン・アンマン] 収蔵)

Baladīya Nāblus, ed. 1972. *Nāblus.* N.p.: n.p.

・年鑑

al-Dajjānī, Burhān, ed. 1966. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1964.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1967. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1965.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1968. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1966.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1969. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1967.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1971. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1968.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1972. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1969.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1973. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1970.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1975. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1971.* Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.

———, ed. 1976. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīnīya li-‘Ām 1972.* Beirut: Mu'assasa

al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.

Manṣūr, Kamīl, ed. 1976. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīniya li-‘Ām 1973*. Beirut:

Mu’assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.

———, ed. 1977. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīniya li-‘Ām 1974*. Beirut: Mu’assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.

———, ed. 1978. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīniya li-‘Ām 1975*. Beirut: Mu’assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.

———, ed. 1979. *al-Kitāb al-Sanawī li-l-Qaḍīya al-Filasṭīniya li-‘Ām 1976*. Beirut: Mu’assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.

・ 百科事典

al-Mar‘ishalī, Aḥmad et al., eds. 1984. *al-Mawsū‘a al-Filasṭīniya. 1st part*. Vol. 1–4. N.p.: Hay’a al-Mawsū‘a al-Filasṭīniya.

Hay’a al-Mawsū‘a al-Filasṭīniya, ed. 1990. *al-Mawsū‘a al-Filasṭīniya. 2nd part*. Vol. 1–7. Beirut: Hay’a al-Mawsū‘a al-Filasṭīniya.

・ 党派出版

Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya. 1990. *Wathā’iq Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya “Ḥamās.”* N.p.: al-Maktab al-I‘lāmī.

Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya, ed. 1976. *Intifāḍa Yawm al-Arḍ*. N.p.:n.p.

———, ed. 1989. *Nidā’āt al-Intifāḍa: Nidā’āt al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwaḥḥada li-l-Intifāḍa m. t. f., 8 Dec. 1987–8 Dec. 1988*. Tunis: al-I‘lām al-Muwaḥḥad, al-Waḥd.

al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwaḥḥada. 1990. *al-Intifāḍa min khilāl Bayānāt al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwaḥḥada*. Tunis: Sharika Funūn al-Rasm wa al-Nashr wa al-Ṣiḥāfa.

〈回顧録・インタビュー書籍〉

Ashrawi, Hanan. 1995. *This Side of Peace: A Personal Account*. New York: Simon and Schuster (邦訳は、アシュラウィ [2000]) .

Baramki, Gabi. 2010. *Peaceful Resistance: Building a Palestinian University under Occupation*. New York: Pluto Press.

- Dayan, Moshe. 1992. *Moshe Dayan: Story of My Life*. New York: Da Capo Press (first published in 1976).
- Gazit, Shlomo. 1995. *The Carrot and the Stick: Israel's Policy in Judaea and Samaria, 1967–68*. Jerusalem: B'nai B'rith Books.
- al-Hassan, Khaled. 1992. *Grasping the Nettle of Peace*. London: Saqi Books.
- Herzog, Chaim. 1996. *Living History: A Memoir*. New York: Pantheon Books.
- JPS (Journal of Palestine Studies), ed. 1979. "The Mood of the West Bank: Interviews with Three West Bank Mayors," *Journal of Palestine Studies* 9(1): 112–120.
- , ed. 1985. "Fahed Qawasmeh: A Final Assessment," *Journal of Palestine Studies*, 14(3): 64–72.
- Nusseibeh, Sari. 2007. *Once upon a Country: A Palestinian Life*. London: Halban Publishers.
- Sharon, Ariel. 1989. *Warrior: The Autobiography of Ariel Sharon, By Ariel Sharon with David Chanoff*. New York: Simon and Schuster Paperbacks.
- al-Fāhūm, Khālīd. 1999. *Khālīd al-Fāhūm Yatadhakkaru*. Damascus: al-Ruwwād li-l-Nashr wa al-Tawzī'.
- al-Ḥasan, Khālīd. 1985. *al-Ittifāq al-Urudunnī al-Filasṭīnī li-l-Taḥarruk al-Mushtarak ('Ammān 1985/2/11)*. Amman: Dār al-Jalīl li-l-Nashr.
- . 1994. *Filasṭīnīyāt: Aḥādīth wa Maqālāt ḥawla Masār al-Taḥawwud (al-Amrīkī, al-Isrā'īlī, al-Filasṭīnī) ilā Ittifāq Ghazza-Arīḥā Awwalan*. Amman: Dār al-Shurūq.
- Ḥawātima, Nāyif. n.d. *Nāyif Ḥawātima Yataḥaddathu*. Damascus: Dār al-Kātib li-l-Ṭibā'a wa al-Nashr wa al-Tawzī' wa al-Tarjama.
- al-Ḥūt, Shafīq. 1994. *al-Ḥall al-Marfūḍ: Ittifāq Ghazza Arīḥā Awwalan*. Beirut: Dār al-Istiqlāl li-l-Dirāsāt wa al-Nashr.
- al-Khaṭīb, Anwar. 1989. *Ma'a Ṣalāḥ al-Dīn fī al-Quds: Ta'ammulāt wa Dhikrayāt*. Jerusalem: Dār al-Ṭibā'a al-'Arabīya.
- Manṣūr, Aḥmad. 2003. *al-Shaykh Aḥmad Yāsīn Shāhid 'alā 'Aṣr al-Intifāḍa*. Beirut: al-Dār al-'Arabīya li-l-'Ulūm and Dār Ibn Ḥazm.
- Mish'al, Khālīd. 2006. *Ḥaraka Ḥamās wa Taḥrīr Filasṭīn*. Beirut: Dār al-Nahār li-l-Nashr.
- Quray', Aḥmad. 2005. *Mufāwaḍāt Ūslū, 1993: al-Riwāya al-Filasṭīnīya al-Kāmila li-l-Mufāwaḍāt*,

- min Ūslū ilā Kharīṭa al-Ṭarīq*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.
- al-Sā'ih, 'Abd al-Ḥamīd. 1994. *Filasṭīn Lā Ṣalāt taḥta al-Ḥirāb: Mudhakkirāt al-Shaykh 'Abd al-Ḥamīd al-Sā'ih*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.
- Suwayd, Maḥmūd. 1998. *al-Tajriba al-Niḍālīya al-Filasṭīniya: Ḥiwār Shāmil ma'a Jūrj Ḥabash*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīniya.
- al-Yaḥyā, 'Abd al-Razzāq. 2006. *Bayna al-'Askariya wa al-Siyāsa*. Ramallah and Jerusalem: Markaz al-Lāji'in wa al-Shatāt al-Filasṭīnī and Mu'assasa al-Dirāsāt al-Muqaddasīya.

### 〈定期刊行物：マイクロ・フィルム資料、Web サイト〉

- 『クドゥス』 (*al-Quds*, エルサレム)、アジア経済研究所図書館所蔵
- 『シャアブ』 (*al-Sha'b*, エルサレム)、ヘブライ大学トルーマン平和研究所（イスラエル）ならびに東京外国語大学附属図書館所蔵
- 『ハヤート』 (*al-Ḥayāt*, ロンドン) <<http://www.alhayat.com/>>
- 『ファジュル』 (*al-Fajr*, エルサレム)、ヘブライ大学トルーマン平和研究所（イスラエル）ならびに東京外国語大学附属図書館所蔵
- 『フィラスティーン』 (*Filasṭīn*, エルサレム)、アジア経済研究所図書館所蔵
- The New York Times* <<http://www.nytimes.com/>>

### 〈未刊行資料〉

- Birzeit University, Palestine Archive. “al-Intifāḍa al-Ūlā 1987.” <<http://awraq.birzeit.edu/?q=taxonomy/term/1082>>
- International Institute of Social History (IISH, Amsterdam). “Al-Qiyada al-Wataniyya al-Muwahhida li-l-Intifada Collection.” Collection ID: ARCH01770.

(注) 統一 (united) は「muwahḥada」と受動態で発音するが、目録では muwahhida と能動態での登録となっている

ナーブルス市立図書館収蔵コレクション

(注) 収集は組織別のボックスに収められ、その中で発行地別、発行年度別に小袋で分類され、それぞれに連番が振られている。統一指導部とハマースを除き目録は作成されていない。本研究では以下の通り表記する。

大分類: 発行組織 (ALF: アラブ解放戦線, PIJ: イスラーム聖戦, B: バアス党,

H: ハマース, F: ファタハ, LP: 解放党, PPP: パレスチナ人民党,  
PCP: パレスチナ共産党, PF: パレスチナ解放人民戦線, UNL: 統一  
指導部, DF: パレスチナ解放民主戦線)

下位分類 (大分類の後に括弧で併記) : 収蔵分類 (Nab: ナーブルス発行, N.N.:  
発行連番なし, N.D.: 発行日付無し,  
N.D., N.N.: 発行連番・発行日付なし,  
Sha: ファタハ若手組織シャビーバ発  
行, その他年号など)

収蔵番号: 資料室での収蔵連番 (各資料左上に円形のシールで記載)

### 〈インタビュー (肩書きは調査時)〉

アター・カイマリー氏 [元 PFLP 活動家] 2013 年 8 月 25 日、西岸地区東エルサレムにて  
サマル・ハワーシュ氏 [開発のためのパレスチナ人女性労働者協会プロジェクト責任者・  
ナーブルス] 2013 年 8 月 20 日、西岸地区ナーブルスにて  
ジャマール・ディーク氏 [ファタハ軍事部門タンズィーム事務所] 2012 年 4 月 2 日、西岸  
地区ラーマッラーにて  
タイスィール・ナスルッラー氏 [PLO ナーブルス県計画開発局長] 2013 年 8 月 17 日、西  
岸地区ナーブルスにて  
ナースィル・ユーニス氏 [パレスチナ労働組合総連合執行委員・パレスチナ運送業組合代  
表] 2013 年 8 月 20 日、西岸地区ナーブルスにて  
バッサーム・シャカア氏 [元ナーブルス市長／1976 年選出] 2012 年 4 月 1 日、西岸地区  
ナーブルスにて  
ラージー・スラーニー氏 [弁護士] 土井敏邦氏よりインタビュー映像 (2001 年 1 月撮  
影、ガザ地区 フィルム番号 R\_709 および R\_710) の提供を受けた  
住民 A [匿名希望・70 代男性] 2013 年 8 月 15 日、西岸地区ナーブルスにて

### 研究文献

#### 〈日本語文献〉

赤尾光春・早尾貴紀編 2011. 『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラ  
とイスラエルの相克——』 人文書院.

- アシュラウィ, ハナン 2000.『パレスチナ報道官——わが大地への愛——』(猪股直子訳)  
朝日新聞社.
- 阿部俊哉 2004.『パレスチナ——紛争と最終的地位問題の歴史——』ミネルヴァ書房.
- アラブ連盟・毎日新聞社編 1981.『エルサレム問題を考える』毎日新聞社.
- 池田明史 1990.「『寛容な占領』神話の蹉跌」池田明史編『中東和平と西岸・ガザ——占領地問題の行方——』研究双書 No.389、アジア経済研究所 3-28.
- 板垣雄三編 1974.『アラブの解放』ドキュメント現代史 13、平凡社.
- 板垣雄三 1992.『歴史の現在と地域学——現代中東への視角——』岩波書店.
- 井筒俊彦訳 1994.『コーラン (上)』(井筒俊彦訳) 岩波文庫 (青) 813-1、岩波書店 (第 43 刷、初刷 1957 年) .
- 訳. 1993.『コーラン (中)』(井筒俊彦訳) 岩波文庫 (青) 813-2、岩波書店 (第 34 刷、初刷 1958 年) .
- 訳. 1994.『コーラン (下)』(井筒俊彦訳) 岩波文庫 (青) 813-3、岩波書店 (第 34 刷、初刷 1958 年) .
- 伊能武次 1991.「エジプトの政治変動——サダト体制と政治エリート——」長沢栄治編『中東——政治・社会——』地域研究シリーズ 10、アジア経済研究所 116-136.
- 今井静 2012.「ヨルダンの対イラク貿易と経済社会構造の変容——1970 年代から 80 年代を中心に——」『日本中東学会年報』28(1): 125-148.
- 今野泰三 2010.「ユダヤ人入植者のアイデンティティと死／死者の表象——ナラティブと墓石・記念碑の分析——」『中東学会年報』26 (2): 89-122.
- . 2015. 「宗教シオニズムの越境——ヨルダン川西岸地区の「混住入植地」を事例として——」『境界研究』5: 57-98.
- 臼杵陽 1988.「ヨルダン現代史に関する覚書——スレイマーン・アン・ナーブルシー内閣の試み——」『日本中東学会年報』3(2): 110-143.
- . 1989.「パレスチナ問題と共産党——パレスチナ共産党の成立 (1982 年) をめぐって——」『歴史評論』468(4 月): 42-55.
- . 1990.「委任統治期パレスチナにおける民族問題の展開——パレスチナ共産党にみる「民族」の位相——」長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 4-100.
- . 1991.「イスラエル占領地の社会経済構造——ヨルダン川西岸の従属化を事例として——」清水学編『現代中東の構造変動』アジア経済研究所 3-55.

- . 1995. 「現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ——故大岩川和正氏の業績に寄せて——」 長沢栄治編『中東の民族と民族主義——資料と分析視角——』アジア経済研究所 1-40.
- . 1999. 『中東和平への道』世界史リブレット 52、山川出版社.
- . 2004. 『世界化するパレスチナ／イスラエル紛争』新世界事情、岩波書店.
- . 2005. 「パレスチナにおけるナショナリズムの起源と展開——『パレスチナ革命』への道——」 酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』イスラーム地域研究叢書第5巻、東京大学出版会 155-182.
- ヴァン・エヴェラ, スティーヴン 2009. 『政治学のリサーチ・メソッド』(野口和彦・渡辺柴乃訳) 勁草書房 (Stephan Van evera, *Guide to Methods for Students of Political Science*, Ithaca: Cornell University Press, 1997).
- 江崎智絵 2013. 『イスラエル・パレスチナ和平交渉の政治過程——オスロ・プロセスの展開と挫折——』MINERVA 人文・社会科学叢書 192、ミネルヴァ書房.
- エマソン, グロリア 1991. 『占領地ガザ——抵抗運動インティファダの日々——』(鴨志田千枝子・佐藤正和訳) 朝日新聞社 (Gloria Emerson, *Gaza: A Year in the Intifada-A Personal Account from an Occupied Land*, New York: Atlantic Monthly Press, 1991).
- 大岩川和正 1980. 「中東問題の核心パレスチナ」季刊『地域』2: 74-79; 1983. 『現代イスラエルの社会経済構造』東京大学出版会 281-289.
- . 1983. 『現代イスラエルの社会経済構造』東京大学出版会.
- 大塚和夫ほか編 2002. 『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
- 奥山眞知 2002. 『イスラエルの政治文化とシチズンシップ』東信堂.
- 小田実・板垣雄三・芝生瑞和編 1985. 『レバノン侵略とイスラエル——国際民衆法廷・東京1983——』三友社出版.
- 小田原紀雄・村山盛忠編 1989. 『パレスチナ民衆蜂起とイスラエル』パレスチナ選書、第三書館.
- 鹿島正裕 2003. 『中東戦争と米国——米国・エジプト関係史の文脈——』御茶の水書房.
- カナファーニー, ガッサーン 2009. 『ハイファに戻って／太陽の男たち』(黒田寿郎・奴田原睦明訳) 河出書房新社 (新装新版初版、初版 1978 年) .
- 木村喜博 1987. 『東アラブ国家形成の研究』アジア経済研究所.
- 京都大学地域研究コンソーシアム (CIAS) 編 2012. 『地域研究』第12巻第2号 (総特集:

地域研究方法論)。

- キング, G, R・O・コヘイン, S・ヴァーバ 2004.『社会科学のリサーチ・デザイン——定性的研究における科学的推論——』(真淵勝監訳) 勁草書房 (Gary King, Robert O. Keohane, Sidney Verba, *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton: Princeton University Press, 1994).
- コービン, ジェイン 1994.『ノルウェー秘密作戦』(仙名紀訳) 新潮社 (Jane Corbin, *Gaza First: The Secret Norway Channel to Peace between Israel and the PLO*, N.p.: Bloomsbury Publishing, 1994).
- ゴイティソーロ, フアン 1997.『パレスチナ日記』(山道佳子訳) みすず書房 (Juan Goytisolo, “Diario Palestino,” and “Ni Guerra, ni Paz,” *El País*, 11 Sep. 1988 and 12 Feb. –17 Feb. 1995).
- サンバー, エリアス 2002.『パレスチナ』(福田ゆき・後藤淳一訳、飯塚正人監修)「知の発見」双書 103、創元社 (Elias Sanbar, *Les Palestines dans le Siècle*, Paris: Gallimard, 1994).
- 清水雅子 2011.「ハマース結成の理念——『イスラーム抵抗運動「ハマース」憲章』——」『イスラーム世界研究』4 (1-2): 441–475.
- . 2012. 「『変革と改革』としてのハマース——パレスチナにおける武装抵抗運動の選挙参加——」『日本中東学会年報』27 (2): 57–81.
- 清水学 1985.「被占領地の経済と政治」パレスチナ・ユダヤ人問題研究会編『パレスチナ——現在と未来——』三一書房 141–154.
- ジュリス, サブリ 1975.『イスラエルのなかのアラブ人』若一光司・奈良本英佑訳、サイマル出版会 (Sabri Jiryis, *The Arabs in Israel 1948–1966*. trans. Meric Dobson, Beirut: The Institute for Palestitne Studies, 1969).
- ジョージ, アレキサンダー、アンドリュー・ベネット 2013.『社会科学のケース・スタディ——理論形成のための定性的手法——』(泉川泰博訳) 勁草書房 (Alexander L. George and Andrew Bennett, *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*. Cambridge: MIT press, 2005).
- 菅瀬晶子 2009.『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ——』溪水社.
- 鈴木啓之 2011.「ハマース憲章全訳——パレスチナ抵抗運動の一側面へのアプローチ——」『アジア・アフリカ言語文化研究』82: 61–93.



- . 2012a. 「パレスチナ党派和解と国連加盟申請——インティファダ後の指導者間関係の変化を軸に——」『中東研究』 514: 64-73.
- . 2012b. 「占領と抵抗の相克——被占領地のパレスチナ人市長を事例に——」『境界研究』 3: 99-116.
- . 2014a. 「抵抗する『市民社会』——パレスチナ被占領地を事例に——」『関連社会科学』 23: 35-53.
- . 2014b. 「パレスチナ被占領地における政治活動の発展——キャンプ・デーヴィッド合意（1978 年）と揺れ動く地域情勢——」『中東学会年報』 30(1): 61-94.
- . 2015a. 「大衆蜂起の言説——インティファダ（1987～1993 年）とリーフレット研究の可能性——」『アジア・アフリカ言語文化研究』 89: 119-165.
- . 2015b. 「2 つのインティファダと和平——西岸地区およびガザ地区と PLO・1987～2000 年——」鶴見太郎・今野泰三・武田祥英編『オスロ合意から 20 年：パレスチナ／イスラエルの変容と課題』（TIAS Middle East Research Series, No.9）95-107.
- . 2015c. 「中東和平と西岸・ガザ地区——暫定自治区設立による「パレスチナ人」の限定化——」『アジア地域文化研究』 11: 216-232.
- . 2016. 「PLO によるヨルダンとの同盟関係の模索・1982～1987 年——インティファダ前史としての外交戦略の展開——」『日本中東学会年報』 32(1): 37-70.
- 高木規矩郎 1989. 『パレスチナの蜂起』読売新聞社.
- 高橋理枝 2000. 「暫定自治下におけるパレスチナ女性運動の新展開——WATC を事例に——」『現代の中東』 29: 73-84.
- 高橋和夫 2010. 『なるほどそうだったのか!! パレスチナとイスラエル』幻冬舎.
- 武内進一 2012. 「地域研究とディシプリン——アフリカ研究の立場から——」『アジア経済』 53 (4): 6-22.
- 立山良司 1989. 『イスラエルとパレスチナ——和平への接点をさぐる——』中公新書 941、中央公論社.
- . 1990. 「西岸・ガザと PLO、ヨルダン」池田明史編『中東和平と西岸・ガザ——占領地問題の行方——』研究双書 No.389、アジア経済研究所 117-143.
- . 1995. 『中東和平の行方——続・イスラエルとパレスチナ——』中公新書 1260、中央公論社.
- 田浪亜央江 2008. 『〈不在者〉たちのイスラエル——占領文化とパレスチナ——』インパクト

ト出版会.

ダルウィーシュ, マフムード 2006『壁に描く』(四方田犬彦訳) りぶるどるしおる.

鶴見太郎 2012.『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ——』東京大学出版会.

土井敏邦 1988.『占領と民衆——パレスチナ——』晩聲社.

飛奈裕美 2008.「エルサレム旧市街のパレスチナ社会における占領下の諸問題と抵抗——商店街の事例から——」『アジア・アフリカ地域研究』7(2): 214-237.

長沢栄治 1991.「中東政治・社会研究における主要な問題領域」長沢栄治編『中東 政治・社会』地域研究シリーズ第10巻、アジア経済研究所 29-73.

———. 2013.『エジプトの自画像——ナイルの思想と地域研究——』東洋文化研究所叢刊第27号、東京大学東洋文化研究所.

中島勇 1994.「インティファダと今後の中東和平——占領地住民の反イスラエル闘争の組織化の経過とその政治的限界——」池田明史編『イスラエル国家の諸問題』研究双書 No.441、アジア経済研究所 123-157.

永田雄三 2009.『前近代トルコの地方名士——カラオスマンオウル家の研究——』刀水書房.

奈良本英佑 1991.『君はパレスチナを知っているか——パレスチナの100年——』ほるぷ150ブックス、ほるぷ出版.

———. 2005.『パレスチナの歴史』明石書店.

———. 2010.「自治政府の何が問題だったのか」ミーダーン編『〈鏡〉としてのパレスチナ——ナクバから同時代を問う——』現代企画室: 112-134.

錦田愛子 2010a.「ヨルダンにおけるガザ難民の法的地位——UNRWA 登録、国籍取得と国民番号をめぐる諸問題——」『イスラーム地域研究ジャーナル』2: 13-24.

———. 2010b.『ディアスポラのパレスチナ人——「故郷」<sup>ḥiṭṭā</sup>とナショナル・アイデンティティ——』有信堂.

———. 2012.「パレスチナにおける抵抗運動の変容——インティファダの展開と政治指導部——」酒井啓子編『中東政治学』有斐閣 155-169.

浜中新吾 2002.『パレスチナの政治文化——民主化途上国への計量的アプローチ——』大学教育出版.

バラカート, アリー 1991.『近代エジプトにおける農民反乱——近代エジプト社会史研究入門——』(加藤博・長沢栄治訳) アジア経済研究所 ('Alī Barakāt, *Intifāḍa al-Fallāḥīn*

*fī Miṣr al-Ḥadīth 1769–1952*, N.p.: n.p., n.d.).

ハルカビ, イェホシャファト 1990. 『ユダヤ国家に未来はあるか イスラエル・運命の刻』  
(奈良本英佑訳) パレスチナ選書、第三書館 (Yehoshafat Harkabi, *Israel's Fateful Hour*,  
trans. L. Schramm, New York: Harper and Row, 1988).

パレスチナ蜂起統一民族指導部編 1993. 『インティファダ——石の革命——』 (同書刊行  
委員会訳) パレスチナ選書、第三書館.

広河隆一 1976. 『パレスチナ 幻の国境』 草思社.

———. 2002. 『パレスチナ 新版』 岩波新書 784、岩波書店.

藤田進 1989. 『蘇るパレスチナ』 新しい世界史 12、東京大学出版会.

古居みずえ 1996. 『増補版 インティファダの女たち——パレスチナ被占領地に行く——』 彩流社.

ベイリー, シドニー・D. 1992. 『中東和平と国際連合——第三次中東戦争と安保理決議 242  
号の成立——』 (木村申二訳) 第三書館 (Sydney D. Bailey, *The Making of Resolution 242*,  
Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers, 1985).

マンスール, シルヴィー 1993. 『石の蜂起——インティファダの子どもたち——』 (吉田恵  
子訳) 現代企画室 (Sylvie Mansour, *Des Enfants et des Pierres: Enquête en Palestine  
Occupée*, Paris: Institut des Études Palestiniennes, 1989).

ミアシャイマー, ジョン・J., スティーヴン・M・ウォルト 2007. 『イスラエル・ロビーとア  
メリカの外交政策』 第I巻・第II巻 (副島隆彦訳) 講談社 (John J. Mearsheimer and  
Stephen M. Walt, *The Israel Lobby and U.S. Foreign Policy*, New York: Farrar, Straus and  
Giroux, 2007).

村上大介 2016. 「日本のジャーナリズムとパレスチナ——エルサレム特派員が見たオスロ合  
意——」 臼杵陽・鈴木啓之編 『パレスチナを知るための60章』 明石書店 384–388.

モラ, ミッシェル、フィリップ・ヴォルフ 1996. 『ヨーロッパ中世末期の民衆運動——青い  
爪、ジャック、そしてチオンピ——』 (瀬原義生訳) ミネルヴァ書房 (Michel Mollat and  
Philippe Wolff, *Ongles bleus, Jacques et Ciompi: Les révolutions populaire en Europe*, Paris:  
Calmann-Lévy, 1970).

森戸幸次 1990. 『パレスチナ戦記——インティファダの深層構造——』 平凡社.

山口博一 1991. 『地域研究論』 地域研究シリーズ第1巻、アジア経済研究所 (再刷 1994年).

横田貴之 2011. 「パレスチナ自治政府」 松本弘編 『中東・イスラーム諸国 民主化ハンドブ

ック』 明石書店 106-133.

リュード, ジョージ 1982. 『歴史における群衆——英仏民衆運動史 1730～1848——』 (古賀秀男・志垣嘉夫・西嶋幸右訳) 法律文化社 (George Rudé, *The Crowd in History: A Study of Popular Disturbances in France and England 1730-1848*, London: Lawrence and Wishart, 1981).

### 〈英語文献〉

Abu Odeh, Adnan. 1999. *Jordanians, Palestinians and the Hashemite Kingdom*. Washington D.C.: United States Institute of Peace Press.

Alimi, Eitan, William Gamson, and Charlotte Ryan. 2006. "Knowing Your Adversary: Israeli Structure of Political Opportunity and the Inception of the Palestinian Intifada." *Sociological Forum* 21(4): 535-557.

Alimi, Eitan Y. 2007. *Israeli Politics and the First Palestinian Intifada: Political Opportunities, Framing Processes and Contentious Politics*. Abingdon and New York: Routledge.

Arnon, Arie. 2007. "Israeli Policy towards the Occupied Palestinian Territories: The Economic Dimension, 1967-2007." *The Middle East Journal* 61 (4): 573-595.

Aronson, Geoffrey. 1990. *Israel, Palestinians and the Intifada: Creating Facts on the West Bank*. London: Kegan Paul International.

Aronson, Shlomo. 2011. *Levi Eshkol: From Pioneering Operator to Tragic Hero- A Doer*. London and Portland: Vallentine Mitchell.

Bailey, Clinton. 1984. *Jordan's Palestinian Challenge, 1948-1983: A Political History*. Boulder and London: Westview Press.

Bishara, Ghassan. 1985. "Khalil al-Wazir (Abu Jihad): the 17th Palestine National Council." *Journal of Palestine Studies* 14(2): 3-12.

Beitler, Ruth Margolies. 2004. *The Path to Mass Rebellion: An Analysis of Two Intifadas*. Lanham: Lexington Books.

Braizat, Musa S. 1998. *The Jordanian Palestinian Relationship: The Bankruptcy of the Confederal Idea*. London and New York: British Academic Press.

Challand, Benoît. 2005. "Looking Beyond the Pale: International Donors and Civil Society Promotion in Palestine." *Palestine-Israel Journal of Politics, Economics & Culture* 12(1):

- Chenoweth, Erica, and Maria J. Stephan. 2011. *Why Civil Resistance Works: The Strategic Logic of Nonviolent Conflict*. New York: Columbia University Press.
- Cobban, Helena. 1984. *The Palestinian Liberation Organisation: People, Power and Politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1990. “The PLO and the ‘Intifada’.” *Middle East Journal* 44 (2):207–233.
- Cohen, Akiba A., and Gadi Wolfsfeld, eds. 1993. *Framing the Intifada: People and Media*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Cohen, Amnon. 1982. *Political Parties in the West Bank under the Jordanian Regime, 1948–1967*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Cohn-Sherbok, Dan, and Dawoud El-Alami. 2001. *The Palestine-Israeli Conflict: A Beginner's Guides*. New Edition (Revised and Updated 2015). London: Oneworld.
- Craissati, Dina. 2005. *New Social Movement and Democracy in Palestine: A Model for the Politics of Civil Society in the Arab World*. Hamburg: Lit Verlag.
- Çuhadar, Esra, and Sari Hanafi. 2010. “Israel and Palestine: Civil Societies in Despair.” In *Civil Society and Peace Building: A Critical Assessment*. ed. Thania Paffenholz, 207–233. Boulder and London: Lynne Rienner Publishers.
- Dakkak, Ibrahim. 1983. “Back to Square One: A Study in the Re-emergence of the Palestinian Identity in the West Bank 1967–1980.” In *Palestinian over the Green Line: Studies on the Relations between Palestinians on Both Sides of the 1949 Armistice Line since 1967*. ed. Alexander Schölch, 64–101. London: Ithaca Press.
- della Porta, Donatella, and Mario Diani. 2006. *Social Movements: An Introduction*. 2nd edition. Malden: Blackwell Publishing.
- Doumani, Beshara. 1995. *Rediscovering Palestine: Merchants and Peasants in Jabal Nablus, 1700–1900*. California: University of California Press.
- Efrat, Elisha. 2006. *The West Bank and Gaza Strip: A Geography of Occupation and Disengagement*. London and New York: Routledge.
- Egan, John P. 1984. “Hebron’s Mustafa Natshe,” *Journal of Palestine Studies*, 13(3): 49–62.
- Eisenstadt, S. N., and L. Roniger. 1984. *Patrons, Clients and Friends: Interpersonal Relations and the Structure of Trust in Society*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Esposito, Michele K. 2005. "The Al-Aqsa Intifada: Military Operations, Suicide Attacks, Assassinations, and Losses in the First Four Years." *Journal of Palestine Studies* 34(2): 85–122.
- Farsakh, Leila. 2003. "Palestinian Labor Flows to the Israeli Economy: A Finished Story?." *Journal of Palestine Studies* 32 (1): 13–27.
- Farsoun, Samih K., and Jean M. Landis. 1990. "The Sociology of an Uprising: The Roots of the Intifada." In *Intifada: Palestine at the Crossroads*. eds. Jamal R. Nassar and Roger Heacock, 15–35. New York: Praeger Publishers.
- Freedman, Robert O., ed. 1998. *The Middle East and the Peace Process: The Impact of the Oslo Accords*. Gainesville: University Press of Florida.
- Gandolfo, Luisa. 2012. *Palestinians in Jordan: The Politics of Identity*. London and New York: I. B. Tauris.
- Ginat, Joseph, and Onn Winckler, eds. 1998. *The Jordanian-Palestinian-Israeli Triangle: Smoothing the Path to Peace*. Oregon: Sussex Academic Press.
- Goodwin, Jeff, and James M. Jasper, eds. 2009. *The Social Movements Reader: Cases and Concepts*. 2nd edition. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Gresh, Alain. 1985. *The PLO, the Struggle within: Towards an Independent Palestinian State*. London: Zed Books Ltd.
- Grossman, David. 1988. *The Yellow Wind*. trans. Haim Watzman. New York: Farrar, Straus and Giroux (デイヴィッド・グロスマン『ユダヤ国家のパレスチナ人』千本健一郎訳、晶文社、1992年).
- Hammami, Rema, and Salim Tamari. 2001. "The Second Uprising End or New Beginning?." *Journal of Palestine Studies* 30 (2):5–25.
- Harms, Gregory. 2005. *The Palestine Israel Conflict: A Basic Introduction*. London and Ann Arbor: Pluto Press.
- Hiltermann, Joost R. 1991. *Behind the Intifada: Labor and Women's Movements in the Occupied Territories*. Princeton: Princeton University Press.
- Hourani, Albert. 1968. "Ottoman Reform and the Politics of Notables." In *Beginning of Modernization in the Middle East: The Nineteenth Century*. eds. William R. Polk and Richard L. Chambers, 41–68. Chicago: University of Chicago Press.

- Hroub, Khaled. 2000. *Hamas: Political Thought and Practice*. Washington, D.C.: Institute for Palestine Studies.
- Hunter, F. Robert. 1991. *The Palestinian Uprising: A War by Other Means*. London and New York: I.B.Tauris.
- Hussey, Andrew. 2014. *The French Intifada: The Long War between France and Its Arabs*. New York: Faber and Faber.
- Jabr, Hisham. 1992. "Financial Administration of the Israeli-Occupied West Bank." In *International Law and the Administration of Occupied Territories*. ed. Emma Playfair, 377–398. Oxford: Clarendon Press.
- Jad, Islah. 2007. "NGOs: Between Buzzwords and Social Movements." *Development in Practice* 17(4/5): 622–629.
- Jamal, Amal. 2005. *The Palestinian National Movement: Politics of Contention, 1967–2005*. Bloomington: Indiana University Press.
- . 2009. *The Arab Public Sphere in Israel: Media Space and Cultural Resistance*. Bloomington: Indiana University Press.
- Jarrar, Allam. 2005. "The Palestinian NGO Sector: Development Perspectives." *Palestine-Israel Journal of Politics, Economics and Culture* 12(1): 43–48.
- Jerusalem Quarterly, ed. 2016. "Ibrahim Dakkak Remembered (1929–2016)." *Jerusalem Quarterly* 66: 6–11.
- Johnson, Penny. 1986. "Palestinian Universities under Occupation." *Journal of Palestine Studies* 15(4): 127–133.
- . 1987. "Palestinian Universities under Occupation, November 1986–January 1987." *Journal of Palestine Studies* 16(3): 134–141.
- JPS (Journal of Palestine Studies), ed. 1979. "The Mood of the West Bank: Interviews with Three West Bank Mayors." *Journal of Palestine Studies* 9(1): 112–120.
- , ed. 1993. "Haydar 'Abd al-Shafi." *Journal of Palestine Studies* 23(1): 14–19.
- , ed. 1995. "Moving Beyond Oslo: An Interview with Haydar 'Abd al-Shafi." *Journal of Palestine Studies* 25(1): 76–85.
- Kanaaneh, Rhoda Ann, and Isis Nusair. 2010. *Displaced at Home: Ethnicity and Gender among Palestinians in Israel*. New York: State University of New York Press.

- Kassis, Mudar. 2001. "Civil Society Organizations and Transition to Democracy in Palestine." *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations* 12(1): 35–48.
- Khalidi, Rashid. 1985. "The Palestinian Dilemma: PLO Policy after Lebanon." *Journal of Palestine Studies* 15(1): 88–103.
- . 1997. *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness*. New York: Columbia University Press.
- Khatib, Ghassan. 2010. *Palestinian Politics and Middle East Peace Process: Consensus and Competition in the Palestinian Negotiation Team*. London and New York: Routledge.
- Khoury, Philip S. 1983. *Urban Notables and Arab Nationalism: The Politics of Damascus 1860–1920*. Cambridge: Cambridge University Press.
- King, Mary Elizabeth. 2007. *A Quiet Revolution: The First Palestinian Intifada and Nonviolent Resistance*. New York: Nation Books.
- Lederman, Jim. 1992. *Battle Lines: The American Media and the Intifada*. New York: Henry Holt and Company.
- Legrain, Jean François. 1991. *Aṣwāt al-Intifāḍa al-Filasṭīniya, 1987/1989*; French title, *Les voix du soulèvement palestinien*. N.p.: CEDEJ.
- Lesch, Ann M. 1980. *Political Perceptions of the Palestinians on the West Bank and the Gaza Strip*. Washington, D.C.: The Middle East Institute.
- Lesch, Ann Mosely, and Mark Tessler, eds. 1989. *Israel, Egypt, and the Palestinians: From Camp David to Intifada*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Litvak, Meir, ed. 2009. *Palestinian Collective Memory and National Identity*. New York: Palgrave Macmillan.
- Lockman, Zachary, and Joel Beinin, eds. 1989. *Intifada: the Palestinian Uprising against Israeli Occupation*. Boston: A Merip Book.
- Lukacs, Yehuda. 1997. *Israel, Jordan, and the Peace Process*. New York: Syracuse University Press.
- Lybarger, Loren D. 2007. *Identity and Religion in Palestine: The Struggle between Islamism and Secularism in the Occupied Territories*. New Jersey: Princeton University Press.
- Ma'oz, Moshe. 1984. *Palestinian Leadership on the West bank: The Changing Role of the Arab Mayors under Jordan and Israel*. London: Frank Cass.
- Madfai, Madiha Rashid. 1993. *Jordan, the United States and the Middle East Peace Process*



- 1974–1991. Cambridge: Cambridge University Press.
- McAdam, Doug, Sidney Tarrow, and Charles Tilly. 2001. *Dynamics of Contention*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McDowall, David. 1989. *Palestine and Israel: The Uprising and Beyond*. California: University of California Press.
- Matar, Ibrahim. 1992. “Exploitation of Land and Water Resources for Jewish Colonies in the Occupied Territories.” In *International Law and the Administration of Occupied Territories*, ed. Emma Playfair, 443–457. Oxford: Clarendon Press.
- Merz, Sibille. 2012. “‘Missionaries of the New Era’: Neoliberalism and NGOs in Palestine.” *Race and Class* 54(1): 50–66.
- Migdal, Joel S, ed. 1980. *Palestinian Society and Politics*. Princeton and New Jersey: Princeton University Press.
- Mishal, Shaul. 1978. *West Bank/East Bank: The Palestinians in Jordan, 1949–1967*. New Haven and London: Yale University Press.
- . 1997. “Intifada Discourse: The Hamas and UNL Leaflets.” In *The PLO and Israel: From Armed Conflict to Political Solution, 1964–1994*, eds. Avraham Sela and Moshe Ma’oz, 197–212. New York: St. Martin’s Press.
- Mishal, Shaul, and Abraham Diskin. 1982. “Palestinian Voting in the West Bank: Electoral Behavior in a Traditional Community without Sovereignty.” *The Journal of Politics* 44(2): 538–558.
- Mishal, Shaul, and Avraham Sela. 2006. *The Palestinian Hamas: Vision, Violence, and Coexistence*. New York: Columbia University Press.
- Mishal, Shaul, and Reuben Aharoni. 1994. *Speaking Stones: Communiqués from the Intifada Underground*. New York: Syracuse University Press.
- Nassar, Jamal R., and Roger Heacock, eds. 1990. *Intifada: Palestine at the Crossroads*. New York: Praeger Publishers.
- Ophir, Adi, Michal Givoni, and Sari Hanafi. 2009. *The Power of Inclusive Exclusion: Anatomy of Israel Rule in the Occupied Palestinian Territories*. New York: Zone Books.
- Pappé (Pappe), Ilan. 1992. *The Making of the Arab-Israeli Conflict 1947–1951*. New York: I.B.Tauris.
- . 2006. *A History of Modern Palestine*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

- . 2010. *The Rise and Fall of a Palestinian Dynasty: The Husaynis 1700–1948*. London: Saqi Books (first published in Hebrew, 2002).
- Pearlman, Wendy. 2011. *Violence, Nonviolence, and the Palestinian National Movement*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peretz, Don. 1990. *Intifada: The Palestinian Uprising*. Boulder and San Francisco and London: Westview Press.
- Playfair, Emma, ed. 1992. *International Law and the Administration of Occupied Territories*. Oxford: Clarendon Press.
- Pundak, Ron. 2002. “From Oslo to Taba: What Went Wrong?.” In *The Israeli-Palestinian Peace Process: Oslo and the Lessons of Failure, Perspectives, Predicaments and Prospects*, eds. Robert L. Rothstein, Moshe Ma’oz, and Khalil Shikaki, 88–113. Brighton and Portland: Sussex Academic Press.
- Quandt, William B. 2005. *Peace Process: American Diplomacy and the Arab-Israeli Conflict since 1967*. 3rd edition. Washington D.C., Berkeley and Los Angeles: Brookings Institution Press and University of California Press.
- Qumsiyeh, Mazin. 2011. *Popular Resistance in Palestine: A History of Hope and Empowerment*. London: Pluto Press.
- Rabah, Jamil, and Natasha Fairweather. 1993. *Israeli Military Orders: in the Occupied Palestinian West Bank 1967–1992*. East Jerusalem: The Latin Patriarchate Printing Press.
- Rishmawi, Mona. 1992. “The Administration of the West Bank under Israeli Rule.” In *International Law and the Administration of Occupied Territories*. ed. Emma Playfair, 267–294. Oxford: Clarendon Press.
- Rothstein, Robert L., Moshe Ma’oz, and Khalil Shikaki, eds. 2002. *The Israeli-Palestinian Peace Process: Oslo and the Lessons of Failure, Perspectives, Predicaments and Prospects*. Brighton and Portland: Sussex Academic Press.
- Roy, Sara. 1995. *The Gaza Strip: The Political Economy of De-Development*. Washington, D.C.: Institute for Palestine Studies.
- . 2007. *Failing Peace: Gaza and the Palestine-Israel Conflict*. London: Pluto Press.
- . 2011. *Hamas and Civil Society in Gaza: Engaging the Islamist Social Sector*. New Jersey: Princeton University Press.

- Rubenstein, Sondra Miller. 1985. *The Communist Movement in Palestine and Israel, 1919–1984*. Boulder: Westview Press.
- Sahliye, Emile. 1986. *The PLO after the Lebanon War*. Boulder and London: Westview Press.
- . 1988. *In Search of Leadership: West Bank Politics since 1967*. Washington: The Brookings Institution.
- Sayigh, Yezid. 1997. *Armed Struggle and the Search for State: The Palestinian National Movement, 1949–1993*. Oxford: Oxford University Press.
- Schiff, Ze'ev, and Ehud Ya'ari. 1990. *Intifada: The Palestinian Uprising: Israel's Third Front*. trans. Ina Friedman. New York: Touchstone, Simon and Schuster.
- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven and London: Yale University Press.
- Shehadeh, Raja. 1984. *Samed: Journal of West Bank Palestinian*. New York: Adama Books.
- Shemesh, Moshe. 1988. *The Palestinian Entity, 1959–1974: Arab Politics and the PLO*. London: Frank Cass.
- Shlaim, Avi. 1988. *Collusion Across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine*. New York: Columbia University Press.
- Suzuki, Hiroyuki. 2014. "Understanding the Palestinian Intifada of 1987: Historical Development of the Political Activities in the Occupied Territories." *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 29 (2): 171–197.
- Tamari, Salim. 1983. "In League with Zion: Israel's Search for a Native Pillar." *Journal of Palestine Studies* 12 (4): 41–56.
- Tamimi, Azzam. 2011. *Hamas: A History from Within*. Massachusetts: Olive Branch Press.
- Telhami, Shibley. 1990. *Power and Leadership in International Bargaining: The Path to the Camp David Accords*. New York: Columbia University Press.
- Winternitz, Helen. 1991. *A Seasons of Stones: Living in a Palestinian Village*. New York: The Atlantic Monthly Press.
- Woolfson, Marion. 1981. *Bassam Shak'a: Portrait of a Palestinian*. Beirut: Third World Center.
- Yahya, Adil. 1990. "The Role of the Refugee Camps." In *Intifada: Palestine at the Crossroads*. eds. Jamal R. Nassar and Roger Heacock, 91–106. New York: Praeger Publishers.
- Zelkowitz, Ido. 2015. *Students and Resistance in Palestine: Books, Guns and Politics*. London and

New York: Routledge.

### 〈アラビア語文献〉

- Anonymous. 1988. “Qirā’a Taḥlīliya Awwaliya fī Bayānāt Munazzama al-Taḥrīr al-Filasṭīniya, al-Qiyāda al-Waṭaniya al-Muwahḥada li-l-Intifāda.” *al-Ṣadāqa* 2(5): 29–61.
- Anonymous. 1989. *Kalimāt ‘alā Bawwāba al-Naṣr: Nidā’āt al-Intifāda Bayān al-Istiqlāl*. Nicosia: Mu’assasa ‘Ībāl li-l-Dirāsāt wa al-Nashr.
- ‘Abd al-Hādī, Maḥdī. 2008. *Filasṭīniyūn*. Jerusalem: PASSIA.
- Abū ‘Amr, Ziyād. 2013. *Khalīl al-Wazīr “Abū Jihād.”* Amman and Ramallah: Dār al-Shurūq.
- Abū Sitta, Salmān. 2007. *Ṭarīq al-‘Awda: Dalīl al-Mudun wa al-Qurā al-Muhajjara wa al-Ḥālīya wa al-Amākin al-Muqaddasa fī Filasṭīn*. London: Hay’a Arḍ Filasṭīn.
- ‘Allūsh, Mūsā. 1991. *Madīna Bīrzayt fī Zill al-Intifāda*. N.p.: n.p.
- ‘Alqam, Nabīl. 2005. *Tārīkh al-Ḥaraka al-Waṭaniya al-Filasṭīniya wa Dawr al-Mar’a fī-hā*. al-Bireh: Markaz Dirāsāt al-Turāth wa al-Mujtama’ al-Filasṭīnī and Jam’iya In’āsh al-Usra.
- al-‘Amāyira, Yāsir Qāsim. 2010. *al-Wāfī fī al-Ittiḥādāt wa al-Niqābāt al-Filasṭīniya: Lamḥa Tārīkhīya, al-Wāqī’*. Damascus: Dār al-Aqsā li-l-Dirāsāt wa al-Nashr.
- al-Az’ar, Muḥammad Khālīd. 1991. *al-Muqāwama al-Filasṭīniya bayna Ghazw Lubnān wa al-Intifāda*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya.
- Bājis, Dalāl. 2012. *al-Ḥaraka al-Ṭullābīya al-Islāmīya fī Filasṭīn: al-Kutla al-Islāmīya Numūdhajan*. Ramallah: Muwāṭin, al-Mu’assasa al-Filasṭīniya li-Dirāsa al-Dīmuqrāṭīya.
- al-Barghūthī, Samar Jawda, ed. 2009. *Simāt al-Nukhba al-Siyāsīya al-Filasṭīniya: Qabla wa ba’d al-Qiyām al-Sulṭa al-Waṭaniya al-Filasṭīniya*. Beirut: Markaz al-Zaytūna li-l-Dirāsāt wa al-Istishārāt.
- al-Dajjānī, Su’ād. 1988. “al-Muqāwama al-Madanīya fī al-Ḍiffa al-Gharbīya.” In *al-Muqāwama al-Madanīya fī al-Niḍāl al-Siyāsī*. ed. Sa’d al-Dīn Ibrāhīm, 83–109. Amman: Muntadā al-Fikr al-‘Arabī.
- Darāghuma, ‘Azzat. 1991. *al-Ḥaraka al-Nisā’īya fī Filasṭīn (1903–1990)*. Jerusalem: Maktab Ḍiyā’ li-l-Dirāsāt.
- Haykal, Muḥammad Ḥasanayn. 1996. *Salām al-Awhām: Ūslū — Mā qabla-hā wa Mā ba’d-hā*. al-Mufāwaḍāt al-Sirrīya bayna al-‘Arab wa Isrā’īl, No. 3. Cairo: Dār al-Shurūq.

- al-Ḥurūb, Khālīd. 1997. *Ḥamās: al-Fikr wa al-Mumārasa al-Siyāsīya*. 2nd edition. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.
- al-Ḥūt, Shafīq, and Bayān Nuwayḥīd al-Ḥūt. 1990. "al-Intifāḍa wa Taṭawwur al-Qaḍīya al-Filasṭīnīya (1987–1988)." In *al-Mawsū'a al-Filasṭīnīya*. 2nd part. Vol. 6, 975–1064. Beirut: Hay'a al-Mawsū'a al-Filasṭīnīya.
- al-'Ilmī, Aḥmad. 1995. *Yawmīyāt al-Intifāḍa: al-Sana al-Ūlā*. Jerusalem: Maṭba'a al-Ma'ārif.
- al-Jarbāwī, 'Alī Bassām. 1989. *al-Intifāḍa wa al-Qiyādāt al-Siyāsīya fī al-Ḍiffa al-Gharbīya wa Qīṭā' Ghazza*. Beirut: Dār al-Ṭalī'a.
- Kayyālī, Mājīd. 1989. "al-Lijān al-Sha'bīya' fī al-Intifāḍa: al-Zāhira, Dawr-hā al-Siyāsī, al-Iqtisādī, al-Ijtimā'ī." *al-Arḍ* 16(6): 10–34.
- Ma'an (Markaz al-'Amal al-Tanammuwī), ed. 1998. *Dalīl al-Mu'assasāt al-Ahlīya al-Filasṭīnīya wa al-'Arabīya (Filasṭīn, al-Urdunn, Miṣr, Lubnān)*. Ramallah: Markaz al-'Amal al-Tanammuwī; Ma'an.
- Maḥmūd, Mu'īn Aḥmad. 2009. *Amīr al-Jihād Khalīl al-Wazīr*. Beirut: Bīsān li-l-Nashr wa al-Tawzī' wa al-I'lām.
- Manṣūr, Anṭuwān, and Jurūj al-Quṣayfī. 1990. "al-Awdā' al-Iqtisādīya wa al-Ijtimā'īya fī al-Ḍiffa al-Gharbīya wa Qīṭā' Ghazza (1948–1984)." In *al-Mawsū'a al-Filasṭīnīya*. 2nd part. Vol. 1, 817–953. Beirut: Hay'a al-Mawsū'a al-Filasṭīnīya.
- Manṣūr, Kamīl et al. 1990. *al-Sha'b al-Filasṭīnī fī al-Dākhil: Khalfīyāt al-Intifāḍa al-Siyāsīya wa al-Iqtisādīya wa al-Ijtimā'īya*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.
- Mūsā, Sulaymān. 1996. *Tārīkh al-Urdunn fī al-Qarn al-'Ishrīn: 1958–1995*. 2nd part. Amman: Maktaba al-Muḥtasib.
- Muṣṭafā, Walīd. 1988. "al-Siyāsī wa al-Iqtisādī fī Nidā'āt al-Qiyāda al-Waṭanīya al-Muwahḥada li-l-Intifāḍa." *Ṣāmid al-Iqtisādī* 10(74): 76–90.
- al-Naqīb, Faḍl. 1997. *al-Iqtisād al-Filasṭīnī fī al-Ḍiffa wa al-Qīṭā': Mushkilāt al-Marḥala al-Intiqālīya wa Siyāsīyāt al-Mustaqbal*. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.
- Naṣṣār, Jamāl. 1990. "al-Ta'bīr al-Siyāsī al-Filasṭīnī fī al-Arḍ al-Muḥtalla." In *al-Sha'b al-Filasṭīnī fī al-Dākhil: Khalfīyāt al-Intifāḍa al-Siyāsīya wa al-Iqtisādīya wa al-Ijtimā'īya*. eds. Kamīl Manṣūr et al., 149–173. Beirut: Mu'assasa al-Dirāsāt al-Filasṭīnīya.
- Nāyifa, Samīr. n.d. *Yawmīyāt Intifāḍa Sijn Nafḥa*. N.p.: n.p.

- Qāsim, ‘Abd al-Sattār. 1989. *Ayyām Mu‘taqal al-Naqab*. Tulkarim: n.p.
- al-Qashṭīnī, Khālīd. 1990. “al-Muqāwama al-Madanīya al-Filasṭīnīya.” In *al-Mawsū‘a al-Filasṭīnīya*. 2nd part. Vol. 5, 283–354. Beirut: Hay’a al-Mawsū‘a al-Filasṭīnīya.
- Ṣāliḥ, Ṣāliḥ ‘Abd al-Jawād. 1990. “Madkhal li-Dirāsa al-Maṣādir al-Awwaliya al-Maktūba li-l-Intifāḍa.” *Āfāq Filasṭīnīya* 5: 78–100.
- . 1991. *Ḥarb al-Bayānāt al-Isrā’īliya al-Muzawwara: Dirāsāt Khāṣṣa ḥawla al-Ḥarb al-Nafsīya dīdda al-Intifāḍa*. Amman: Markaz al-Quds li-l-Dirāsāt al-Inmā’īya.
- al-Sharafī, Muḥammad. 1989. “al-Khiṭāb al-Siyāsī fī Nidā’āt al-Intifāḍa.” *al-Ṣadāqa* 3(7): 58–71.
- Sulaymān, Fahd, and Mu‘taṣim Ḥamāda. 2012. *‘Ashū min ajl Filasṭīn: Shuhadā’ al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya li-Taḥrīr Filasṭīn, 1969–1982*. Damascus: al-Markaz al-Filasṭīnī li-l-Tawthīq wa al-Ma‘lūmāt.
- Sulaymān, Muḥammad et al, eds. 1988a. *al-Intifāḍa: Ḥarb al-Istiqlāl al-Filasṭīnī*. Kitāb “Filasṭīn al-Thawra” No.4. Nicosia: Mu’assasa Bīsān li-l-Ṣiḥāfa wa al-Nashr.
- , eds. 1988b. *Qarār al-Intifāḍa Filasṭīn sa-Tantaṣīru*. Kitāb “Filasṭīn al-Thawra” No. 8. Nicosia: Mu’assasa Bīsān li-l-Ṣiḥāfa wa al-Nashr.
- Zayyād, Tawfīq. 2000. *Dīwān Tawfīq Zayyād*. Beirut: Dār al-‘Awda.

## 〈ウェブサイト〉

- 国際連合広報センター「国連憲章テキスト」 <[http://www.unic.or.jp/info/un/charter/text\\_japanes](http://www.unic.or.jp/info/un/charter/text_japanes)> (アクセス日：2017年1月31日)
- The Middle East Media Research Institute (MEMRI). “About MEMRI.” <<http://www.memri.org/content/en/about.htm>> (アクセス日：2011年11月21日)
- B’tslem. “Fatalities in the First Intifada.” <[http://www.btselem.org/statistics/first\\_intifada\\_tables](http://www.btselem.org/statistics/first_intifada_tables)> (アクセス日：2015年12月4日)
- Birzeit University. “Birzeit University Palestine Archive.” <<http://awraq.birzeit.edu/>> (アクセス日：2014年12月7日)
- Council on Foreign Relations (CFR). “The Reagan Plan: U.S. Policy for Peace in the Middle East.” <<http://www.cfr.org/israel/reagan-plan-us-policy-peace-middle-east/p14140>> (アクセス日：2015年9月8日)
- Human Rights Watch (HRW). *Not Welcome: Jordan's Treatment of Palestinians Escaping Syria*.

<<http://www.hrw.org/node/126091>> (掲載日 2014 年 8 月 7 日、アクセス日 : 2014 年 10 月 25 日)

International Journal of Middle East Studies (IJMES). “IJMES Transliteration system for Arabic, Persian, and Turkish.” <<https://www.cambridge.org/core/services/aop-file-manager/file/57d83390f6ea5a022234b400>> (アクセス日 : 2017 年 1 月 31 日)

Israel, Knesset. “Basic Law: Jerusalem, Capital of Israel (Unofficial translation).” <[https://www.knesset.gov.il/laws/special/eng/basic10\\_eng.htm](https://www.knesset.gov.il/laws/special/eng/basic10_eng.htm)> (アクセス日 : 2016 年 1 月 18 日)

Israel Ministry of Foreign Affairs. “33 Press Conference with Justice Minister Libai on Repeal of Law Banning Meetings with the PLO- 3 December 1992.” <<http://mfa.gov.il/MFA/ForeignPolicy/MFADocuments/Yearbook9/Pages/33%20Press%20Conference%20with%20Justice%20Minister%20Libai%20on.aspx>> (アクセス日 : 2015 年 12 月 24 日)

The New York Times. “Jordan Drops \$1.3 Billion Plan For West Bank Development.” <<http://www.nytimes.com/1988/07/29/world/jordan-drops-1.3-billion-plan-for-west-bank-development.html>> (アクセス日 : 2016 年 3 月 22 日)

Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs (PASSIA). *Land and Settlement*. <[http://www.passia.org/images/meetings/2015/Material%20for%20the%20Website/Land%20&%20Settlement%20\(2015\).pdf](http://www.passia.org/images/meetings/2015/Material%20for%20the%20Website/Land%20&%20Settlement%20(2015).pdf)> (掲載日 2015 年、アクセス日 : 2016 年 5 月 6 日)

———. *PLO vs. PA*. <<http://www.passia.org/images/meetings/2014/oct/28/PA-PLO2.pdf>> (掲載日 2014 年 9 月、アクセス日 : 2014 年 11 月 5 日)

Qalqīliya bayna al-Ams wa al-Yawm. “al-Shahīd al-Qā’id Walīd Aḥmad Namr al-Naṣr (Abū Alī Īyād).” <<http://www.myqalqilia.com/Abu-ali-iyad.htm>> (アクセス日 : 2017 年 2 月 22 日)

Shabaka Ajyāl al-Idhā’īya. “al-Dhikrā 41 li-Istishhād Abū ‘Alī Īyād.” <<http://www.arn.ps/archives/30177>> (アクセス日 : 2017 年 2 月 22 日)

Union of Palestine Women’s Committees. <<http://www.upwc.org.ps/>> (アクセス日 : 2017 年 2 月 2 日)

UN (United Nations). 1974. *Resolution 3237 (22 Nov. 1974), Observer Status for the Palestine Liberation Organization*. <[http://www.un.org/ga/search/view\\_doc.asp?symbol=A/RES/3237\(XXIX\)](http://www.un.org/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/3237(XXIX))> (アクセス日 : 2017 年 2 月 3 日)

———. 1975. *Resolution 3379 (10 Nov. 1975), Elimination of All Forms of Racial Discrimination*.

- <<https://documents-dds-ny.un.org/doc/RESOLUTION/GEN/NR0/000/92/IMG/NR000092.pdf?OpenElement>> (アクセス日 : 2017 年 2 月 3 日)
- . 1979. *Resolution 34/29 (16 Nov. 1979), Situation in the Occupied Territories*. <<http://www.un.org/documents/ga/res/34/a34res29.pdf>> (アクセス日 : 2017 年 1 月 31 日)
- . 1991. *Resolution 4686 (16 Dec. 1991), Elimination of Racism and Racial Discrimination*. <[http://www.un.org/en/ga/search/view\\_doc.asp?symbol=A/RES/46/86](http://www.un.org/en/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/46/86)> (アクセス日 : 2017 年 2 月 3 日)
- USAID. “CSV - Foreign Aid Explorer.” <[https://explorer.usaid.gov/prepared/us\\_foreign\\_aid\\_country.csv](https://explorer.usaid.gov/prepared/us_foreign_aid_country.csv)> (アクセス日 : 2016 年 5 月 29 日)
- Mu’assasa al-Quds li-l-Thaqāfa wa al-Turāth. “‘Abd al-Jawād Ṣāliḥ.” <[http://alqudslana.com/index.php?action=individual\\_details&id=2414](http://alqudslana.com/index.php?action=individual_details&id=2414)> (アクセス日 : 2011 年 12 月 2 日)
- al-Majlis al-Waṭanī al-Filasṭīnī (PNC). “Dawrāt al-Majlis al-Waṭanī 1964–1996.” <<http://www.palestinepnc.org/>> (アクセス日 : 2015 年 12 月 18 日)
- al-Tashrī‘āt al-Urdunnīya. “Qanūn al-Baladīyāt li-‘Ām 1955.” <[http://www.lob.gov.jo/ui/laws/general\\_law.jsp?no=29&year=1955&mod=1](http://www.lob.gov.jo/ui/laws/general_law.jsp?no=29&year=1955&mod=1)> (アクセス日 : 2013 年 11 月 28 日)
- Wafa (Wikāla al-Anbā’ wa al-Ma’lūmāt al-Filasṭīnīya). “Ittiḥād al-Ghuraf al-Tijārīya al-Ṣinā’īya al-Zirā’īya al-Filasṭīnīya.” <<http://www.wafainfo.ps/atemplate.aspx?id=8938>> (アクセス日 : 2013 年 6 月 17 日)
- . “al-Munazzamāt ghayr al-Ḥukūmīya.” <<http://www.wafainfo.ps/northsoc.aspx>> (アクセス日 : 2013 年 6 月 25 日)
- . “Bayānāt al-Intifāḍa.” <<http://www.wafainfo.ps/atemplate.aspx?id=3973>> (アクセス日 : 2014 年 3 月 13 日)
- . “Wathīqa I’lān al-Istiqlāl.” <<http://www.wafainfo.ps/atemplate.aspx?id=3741>> (アクセス日 : 2015 年 12 月 16 日)

## 〈統計資料〉

Department of Statistics, Jordan, ed. 1964. *First Census of Population and Housing: 18th. November 1961*. Amman: Department of Statistics Press.



- UNCTAD (United Nations Conference on Trade and Development). 1994. *Population and Demographic Developments in the West Bank and Gaza Strip until 1990*. UNCTAD/ECDC/SEU/1. <<http://unctad.org/en/docs/poecdscseu1.en.pdf>> (アクセス日 : 2015 年 11 月 26 日)
- . 1995. *Developments in the Services Sector in the West Bank and the Gaza Strip, 1967–1990*. UNCTAD/ECDC/SEU/7. <<http://unispal.un.org/UNISPAL.NSF/0/B0C14582019345E8802564720058DB97>> (アクセス日 : 2013 年 11 月 20 日)
- World Bank Comodity Price Data. <<http://www.worldbank.org/en/research/commodity-markets>> (アクセス日 : 2016 年 5 月 25 日)

#### 〈写真〉

- Birzeit University Palestine Archive, “Intifāḍa al-Ḥijāra: al-Muqāwama al-Sha‘bīya athnā’a al-Intifāḍa al-Ūlā.” <<http://awraq.birzeit.edu/?q=node/5083>> (アクセス日 : 2015 年 12 月 2 日)
- UN (United Nations) Multimedia, “UN General Assembly Takes up Question of Palestine.” <<http://www.unmultimedia.org/s/photo/detail/577/0057701.html>> (アクセス日 : 2017 年 3 月 20 日)